
論 説

〈政治哲学の死〉の影で

——冷戦期アメリカ国際関係論の精神史——

西 村 邦 行

はじめに

1. 冷戦初期の精神史的前提
 - (1) 戦間期ヨーロッパにおける理性への懐疑
 - (2) 戦後アメリカまで覆う問題圏
 - (3) 国際政治学者たちに及ぶ〈政治哲学の死〉
2. 前線としてのアメリカ
3. 問題のアメリカにおける変容
 - (1) 啓蒙近代の巻き返し
 - (2) 多様性への不安
 - (3) 〈政治哲学の死〉が支える「アメリカの社会科学」

おわりに

はじめに

フランシス・フクヤマのよく知られた総括において、冷戦とは長きにわたる思想史の帰結だった。自由主義の勝利という、当時耳目を集めたその結論は、折々の出来事が持つ意味を査定する際に今日でも引き合いにだされる。他方、その議論の核心が時事的な問題の診断にあるのではないことも、著者が当初から注意を促していたところだった。

問題は、括弧書きの「歴史」、大きな物語と呼ぶべき次元で展開されてきた人間文明の変遷において、主と僕の角逐が終焉を迎えたことであった。国家

その他の集団はこれからも自由主義をとったりとらなかつたりするだろう。自由主義体制のあいだでもその理念の実現度合いには違いがでるだろう。けれども社会構想としての優劣を言う、考える他の仕組みに比してこの体制が秀でていることは、今や疑いを入れがたい。ヘーゲルもマルクスも『歴史の終わり』を一つ想定していた。「ヘーゲルにとってそれが自由主義国家であったとすれば、マルクスにとってそれは共産主義社会であった」¹⁾。世界大戦と全体主義を通じてとりわけ前者への信頼が揺らぐと、両イデオロギーの対立はいよいよ熾烈なものとなった。しかし結局は、自由主義が挑戦者を制した。この歴史像において、冷戦とは、フランス革命以来続いた長い知性史の一階梯であった。

アメリカ国際関係論の学説史においても、冷戦はよく（暗黙裡に）持ち込まれてきた。諸理論がどこから生まれてきたのかを問うならば、権力政治の現実をその背景に見なければならぬというわけである。しかし、それらの説明はえてして、具体的根拠を欠く連想にとどまってもきた。二極対立の持続が構造的現実主義のひらめきをもたらしたなどと聞けば、どことなく納得はさせられる²⁾。実際、それもまたかの理論が生まれてきた一つの背景ではあったかもしれない。しかし、テキストと文脈のいずれを読み解くにあたって、この見方をめぐって細かに論証が試みられた跡はない³⁾。この実証されざる公理を支えるのは、皮肉にも、自然主義的ないし実証主義的な夢なのだろう。国際政治を扱うのだからもちろん当時の世界情勢を反映しているに違いない、というわけである。しかし、現実の人間は、自身を取り巻く世界について常に明瞭な像を描きながら生きられるのでもないし、後世の解釈に沿って区切られた時間を生きているわけでもない。冷戦の主たる意味を二極対立の持続に見るのは、それ自体が一つの解釈である。その点を認識した上で、ある時代の人々が同時代の事象について単一の理解を共有していたなどと言うのなら、それはほとんど歴史学という営為の否定だろう。

〈国際関係論と冷戦〉は、新しいテーマではない。それはむしろ、旧来的な物の見方が深く刻印されたテーマだと言える。二つの語を結びつけること

にそれほどためらいが感じられないとすれば、それは、従来のな価値前提の楔がそこに固く打ち込まれているからである。だとすれば、どう捉えられた意味での冷戦が問題にされるべきなのかが、まずは考察の射程とともに限定されなければならない。

考えられる道はいくつかある。一つは、この価値前提を内から暴き立てるべく、既存の学説史を批判的に捉えなおす道である。けれども、過去四半世紀以上にわたって研究者たちが整えてきたこの道は、ここで改めて踏み固められるところではない⁴⁾。あるいは、研究助成等の仕組みを詳らかにすることで、反共政策と学術諸領域の結合を描くといった社会史的ないし知識社会学的な道もある。しかし、これもまた、「新しい冷戦史」を通じて長らく成果が積み重ねられてきた領野である⁵⁾。本稿で引くいくつかの文献にもその知見は活かされており、以下の叙述とも内容が関連しあう面はあるにしても、この筋がそれ自体として小論でなぞりなおされることはない。当時のテクストに忠実な分析を行おうとすれば、個々の論客が展開した折々の時評を読み解く道もある⁶⁾。しかし、この方途をとった場合には、問題枠組みとしての冷戦を脇へと遣りかねない。ともかくも冷戦を一つの大枠として参照する本稿においては、そうした論評の背後にもあったと思われる、彼らの同時代像を問題としたい。研究者たちが当時様々な事象を分析し解釈していたとして、その土台に——あるいは当人にも意識されざる形で——横たわっていたのは、自身がどのような時代に生きているという感覚だったのだろうか。こう課題を設定したときに手掛かりとなるのが——精緻とは言えないにしても大胆なやり方でフクヤマが一例を示した——文明史的な型の思惟である。

対外政策の実践に対してもその理論の形成に対しても、冷戦下の個々具体的な事象は影響を与えはしただろう。ただ、その背後には、より大きな思想史の流れもあった。冷戦というのは、近代ヨーロッパにおける知の伝統が二度の大戦で迎えた頓挫の、その延長上にある事象であった。全体主義国家ソ連の向こうを張るアメリカは、大西洋を跨いだ先へと場を移した同じ戦いの前線であった。本稿では、このような意味の冷戦に着目する。そうして、後

世からは国際関係論と呼ばれるようになった一群の思索を、20世紀の後半に西洋精神史がとった固有な自己表現と捉えなおしてみたい⁷⁾。

まずは、第二次世界大戦前後のヨーロッパにおいて、人間の理性に対する懐疑が先鋭なものとなっていた様子を確認する。同じ意識は、いくらかの人的な連続性まで通じ、戦後のアメリカでも保たれていくこととなるだろう。〈政治哲学の死〉として言い表されるようになったこの世界観は、国際関係論の古典的論客たちをも覆うものであった。

このヨーロッパ的な〈政治哲学の死〉の意識も、とりわけ冷戦という状況の下では、アメリカによってこそ対峙されるべきものと捉えられる。ただし、そこでは、元来固有にアメリカ的であった問題までが徐々に、この普遍的な問題枠組みのなかへ入れ込まれていくこととなる。

ケネス・ウォルツを筆頭に、〈科学派〉と呼びならわされてきた理論家たちにしても、自らの思索を体系立てていくなかで第一に取り組んでいたのはこの問題であった。ここで特に目を引くのが、ウォルツの構造的現実主義とジョン・ロールズの正義論とを彩る思惟様式の近さである。ウォルツに代表される理論的傾向はまもなく「アメリカの社会科学」にすぎないとの告発を受ける。そうした論陣の急先鋒に立ったスタンリー・ホフマンは、ロールズの思惟への批判者でもあった。

こうして半世紀超の流れを振り返ってみると、冷戦期、さらにはその後今日までを通じて展開されてきた国際関係論という企ては、20世紀ヨーロッパに発しアメリカ的に翻案された思想的問題への、一貫した応答と解することができる。ひるがえって冷戦という事象は、この翻案を可能にした一大契機という意味においてこそ、国際関係論の生成に影響を与えたと言える。

1. 冷戦初期の精神史的前提

(1) 戦間期ヨーロッパにおける理性への懐疑

冷戦が歴史上に占める位置とはどのようなものか。この点をめぐり思想的な観点からともかくもまとまった像を与えている先例として、フクヤマの視座を引き続き議論の足掛かりとしよう。彼のあの冷戦史像はどこから現れたものだったのだろうか。

「歴史の終わり」という構想が哲学者アレクサンドル・コジェーヴのヘーゲル解釈を下敷きにしていた点は、当初から知られてきたところである。人間は他者からの承認を求める生き物である。その点に鑑みればこそ、共産主義には問題がある。「今日、共産主義が自由民主主義にとって代わられつつあるのは、共産主義がもたらす型の承認には大いに欠陥があるとの認識ゆえである」⁸⁾。このような診断が下された際、そこで土台となっていたヘーゲル解釈こそは、コジェーヴからの借りものであった。

1933年から1939年にコジェーヴが高等研究実習院(École Pratique des Hautes Études)で行ったヘーゲルの宗教哲学をめぐる講義は、フランス哲学史上に画期を成すものであった。存在と当為の峻別を旨に、人間の文化的活動をめぐる厳密科学の構築へと進んだ新カント派にとって、ヘーゲルと言えば退けられるべき非合理的なロマン主義者だった。しかし、世界大戦を背景としてその新カント派が退潮を見た後は、ヘーゲルこそがむしろ、当代の容れるべき知だとされる。非合理的なものを潜り抜けた先に合理的なものを見る——しかもその弁証法的な過程をヨーロッパの歴史そのものに重ねる——、そうした哲学者としてヘーゲルを復権させたのが、他ならぬコジェーヴだった。

ただ、この意味で彼のヘーゲルは、歴史が行き着く先に見せる明るい情景ばかりを謳いあげる存在ではなかった。「コジェーヴの解釈は、概して、ヘーゲル思想の理性的かつ鎮静的な局面を強調することは決してせず、その

逆説的な、過度な、暴力的な、そしてとりわけ血なまぐさい諸契機に固執して悦に入る」⁹⁾。自律した理性的個人が寄り集まり漸次進歩を実現していくという自由主義の理想は、今や危機に瀕している。しかし、では、他にどのような行き先があるのか。そういう問いが、そこでは提起されていた。ゆえに歴史は、その展開過程において、非合理的な諸力との陰惨な対決を経なければならなかった¹⁰⁾。フクヤマが伝えている（と、ときに思われてきた）その楽観的な装いと異なり、コジェーヴの歴史観には不穏な刻印がまとわりついていた¹¹⁾。事実、彼が光をあてることとなった、ヘーゲル哲学における否定性の契機は、ラカンやフーコーといった人々を刺激し、構造主義からポスト構造主義へと至る思潮の導き手ともなるだろう¹²⁾。

(2) 戦後アメリカまで覆う問題圏

戦間期に展開されていたそのヘーゲル読解が、『精神現象学』のフランス語訳と時を同じくして公刊されるのは、第二次世界大戦後まもない1947年のことであった。それはちょうど、冷戦の火ぶたがいよいよ切れようとしており、またアメリカにおいて国際関係論が学問分野としての独立性を探り始めていた、まさにその時期であった。

共時性だけが問題なのではない。戦間期のヨーロッパと戦後のアメリカには、人的な次元でも連続性があった。ドイツから亡命した知識人たちがアメリカの諸学問に与えた影響については、現代史学のなかでも議論が重ねられてきた¹³⁾。ナチスによる混乱は、アメリカにとって、大陸の優れた研究者たちを自国に招き入れる機会でもあった。各種財団の助成制度なども通じて、戦後の学知を支える人材が大西洋を越えた。フランクフルト学派の面々を筆頭として、ハンナ・アーレントやレオ・シュトラウスといった政治哲学者たちも、この亡命者の一群に含まれていた¹⁴⁾。

こうした輪のなかにあつては、同時代の世界が思想史上に占める位置をめぐって、一定の感覚もまた共有されることとなった。今触れたアーレントと

シュトラウスに、やはり亡命学者のエリック・フェーゲリン、さらにアメリカの政治理論家シェルドン・ウォーリンを並べた上で、その共通性を指摘したのはジョン・ガネルである¹⁵⁾。彼に言わせれば、これらの論客はみな、ヨーロッパの知的伝統が現代へ向けて没落してきたのだという。この理解は図式的な単純化を含んではいる。とは言え当時の政治思想界隈を包んでいた空気を伝えてもいる。この世代の人々が拳って問題としていたのは、〈政治哲学の死〉だった。

この標語それ自体は、1956年、イギリスの政治思想家ピーター・ラズレットが発したものとして知られる。曰く、自分たちが生きる社会の問題を思想的な視座から語るという伝統は、ホップズからボザンケまでを経た後に途絶えた。「ともあれ当面、政治哲学は死んでいる」。理由は何か。合理化の進展とともに、「政治が哲学者に任せるには深刻にすぎるものとなったから」である。代わってその座は、社会の自然科学的な分析を旨とする社会学が占める。哲学それ自体も、「あらゆる倫理的言明の論理的信望を疑問に付す」論理実証主義者たちが担う。彼らは、壮大な構想を打ちたてようとするよりも諸概念の意味を明晰化することに専心する。言語の厳密な分析こそが、彼らの生業となるだろう。倫理学の応用領域に位置してきた政治は今や規範的に語るべき代物ではなくなったのであり、日々問題はその都度の技術的手法へと託されるようになった¹⁶⁾。

ラズレット本人は、この死刑宣告をいくらか肯定的に捉えており、19世紀以来の歴史主義を受け入れるかのようでもある。個々の思想が各時代の文脈に条件づけられたものであるとするその姿勢からは、いわゆる文脈主義の方法もじきに台頭してくることだろう¹⁷⁾。しかし、そうした政治思想史学の展開は、今は措こう。ここで重要なのは、彼が開陳していたその問題認識である。それこそは当時、主だった論客たちに共通してうかがわれるものであった。

ラズレットに先立つこと3年、背景の歴史にも言葉を足しながら、しかし実質においてよく似た認識を表明していたのが、同じイギリスに研究拠点を

持つアルフレッド・コバンだった。「政治理論の没落」と題された論文で、彼は次のように言う。同時代において、思想の巨人と呼ぶべき人物は見られなくなった。社会のあり方について規範のないし理論的な視座からは考えようとしない傾向が、世の中全体を包んでいる。原因は何か。技術合理性が台頭し、実践的な判断に基づいて進められるものとしての政治が衰退したためである。今日の人間は、理性を駆使して倫理的な秩序を自らが打ちたてることに諦めを感じている。代わって彼らが目指すのは、権力の法則や統治のシステムから振り落とされないよう心掛けることだけである。実践から切り離された学問の世界でばかり政治が論じられるようになったことにも、こうした傾向の一因はある。しかし、より大きな淵源は、当為を存在から峻別し具体的な歴史状況の下での規範的な判断を避ける、近代以後の精神にある。このような姿勢は、19世紀以来連綿と続いてきたものであって、「共産主義ロシアと資本主義アメリカが共通に持っている何か」だった¹⁸⁾。

ラズレットもコバンも、大陸ヨーロッパにより近いイギリスの政治学者ではあった。とは言え、同じ意識の持ち主は、シュトラウスやアーレントをはじめとして、アメリカにも複数渡っていた¹⁹⁾。ラズレット自身、自らの編んだ論文集が専ら同国人らによって書かれたものであることに触れつつ、しかし「彼らが執筆を行ったところの状況は決してこの国に限られたものではない」との留保を付していた²⁰⁾。コバンの論文について言うと、それが掲載されたのは、ジョン・バージェス以来のアメリカ政治学を代表する『季刊政治学 (Political Science Quarterly)』であった。

アメリカへの亡命者であったジュディス・シュクラーは、〈政治哲学の死〉をとりわけ典型的な形で表現していた存在だと言いうる²¹⁾。その著書『ユートピア以後』で描かれた同時代の世界は、あるべき社会を規範的に語りえた時代の、(題名どおり)その後位置づけられていた。

普遍的な言葉で政治を思惟することはなにか空しいことのように思われてきた。……歴史的な研究は豊富にあり、政治過程とか政治制度につい

ての記述的分析もまた豊富である。しかし人類の政治的未来のために荘厳な計画を構想しようという衝迫は過ぎ去ってしまった。そうした企てにとって必要とされるユートピア的信念の最後の痕跡すらも消失してしまった。²²⁾

人類はいつからこのような時代に入ったのか。それはやはり両大戦以降である。その根はどこにあるのか。これもやはり啓蒙近代に辿られる。「啓蒙主義は社会的楽観主義の頂点として聳え、そこからわれわれは漸次、しかも断え間なく、下降してきたのであった」²³⁾。人間は理性的であるがゆえに強制力によるとりまとめなど要しないという理想、そうした自由主義的思惟への批判と応答が至り着いた先にこそ、全体主義が出来たのだった。

こうした没落は目下抜けだしえないものですらあった。「著者は独創的な政治理論を構築できず、また敢えてそうしようとも思わない、その限りにおいてまさに時代精神を共有しているのである」²⁴⁾。すべては歴史や社会といった何か大きなものに決められており、無力な個人は自ら未来をつくりあげようとしな。それこそが全体主義の時代精神である。ゆえにシュクラー自身が為すのも、反啓蒙の諸思想が解決を与えはしないことを示すという、概して消極的な作業である。啓蒙以後の展開が行き着いた〈政治哲学の死〉とは、彼女の見るところ、同時代の世界の基底を成す心性であった。

(3) 国際政治学者たちに及ぶ〈政治哲学の死〉

知識人界隈を席卷してきた標語には、曖昧であるがゆえに流通したものも少なくない。〈政治哲学の死〉もまた、その手のパラダイムではあったかもしれない。一見すると同様の主題を掲げていた人々も、議論の細部を見ていけばそれなりの違いがあった。しかし、そのような代物であればこそ、多様な人々が共通の土台に立って主張を交わしあうこともできたのだろう。当時の研究者たちが広く同じ問題圏に属して思索を進めていた様子を、パラダイ

ムが抱えていた曖昧性こそが示唆しているように思われる。

コジューヴがヨーロッパで垣間見せていたところの意識は、少なくともそのような意味において、冷戦初期のアメリカにも横たわっていた。この問題意識は、やはり人的なつながりまで含め、国際関係論にとっても無関係などではなかった。戦後現実主義の祖にして冷戦期アメリカ外交の指導的論客であったハンス・モーゲンソーは、同じ亡命知識人として、アーレントやシュトラウスの知己であった。

そのアーレントやシュトラウスではなく、ここで特にシュクラーに言及したことには意味がある。これまで国際関係論においてほとんど触れられてこなかった彼女の議論にこそ、古典的現実主義者と呼ばれてきた人々との近さは——少なくともテキスト上で直接の言及が見られる限りにおいて——より明確に認められるのである。

個別の論点は以下で追うとして、今は同時代の証言を確認しておくとしよう。その代表例と言えるものが、ウォーリンによる『ユートピア以後』の書評である。

ラズレットとシュトラウスへの言及で始まるこの書評において、シュクラーへ向けられた評価はそれほど好意的なものではない。彼女の議論は、急進主義の没落と政治理論一般の没落を同視する「仮説に基づいて進むのだが、それは実際にはまったく論じられることがない」²⁵⁾。シュクラーが説いているのは特定のイデオロギーや信条の没落であって理論的思惟自体の没落ではないのではないか、ヴォルテールからコンドルセに至る人々も疑うことなしに理性の力を信奉してなどいなかっただろう、ロック以降のイギリス自由主義者たちにとって重要だったのはより個別的な争点と言える所有権の問題であった、などなど。

こうしたウォーリンの評には、少なからず妥当なものがあるように思われる。実際、シュクラーには、近代や啓蒙という語を道具的に用いて自分なりの西洋史像を創作していた面があったかもしれない²⁶⁾。ただ、本稿にとって重要なのは、この批判の適否ではない。政治理論が停滞しているという時代

の空気を共有しながらも、その正体とそれを解き明かす方法に関してはシュクラを批判するウォーリンが、議論のただなかにあつて古典的現実主義者たちを呼びだしていること、これこそが着目すべき点である。

マブリ、モレリ、ルソーといった著述家からでなく、主に自由主義者の著作から著者が自らの「急進主義」および「空想主義」像をつくりあげていることは、強調されるべきである。このために、彼女の解釈は、E・H・カー、ハンス・モーゲンソー、ラインホルド・ニーバーといった「現実主義者たち」によって打ちたてられた雑多な立ち位置のなかにうまく収まることとなる。²⁷⁾

ここに仄めかされているのは、現実主義者たちもまた〈政治哲学の死〉の影で思索を行っていたとの認識である。そうした認識が同時代人にとって奇異なものでなかったことも、同時に読みとることができるかもしれない²⁸⁾。

廻れば先のコバンなども、実のところ既に同様の認識を示していた。「同時代の政治状況について重要なことを言った」人たちであつて、「その著作を研究してみても政治理論の没落に関する同じ結論がでてくるように思われる」論客のなかに、モーゲンソー、カー、ニーバーらの名を彼は含めていたのだ²⁹⁾。ウォーリンやコバンの理解を裏づけるかのようにして、現実主義者たちも事実、ある種の没落史観を語った。「われわれが今日生きている危機は、政治的な危機以上のものである」と、早くも戦時中にたとえばニーバーは言っていた。「われわれが知ることができるのは、20世紀が、それに先立つ数世紀にわたる近代の夢に最も悲劇的なかたちで異議を申し立ててきたということと、この異議申し立てのゆえに近代文化は痛ましい混乱に陥っているということだけである。混乱がそれほどまでに大きい理由の一端は、近代文化には、昨日までの確かさが今日の現実によって失われたことに気づいたときに向かうことができるような、生と歴史についての代替案がないことである」³⁰⁾。

こうした歴史観は、彼らの政治思想とも結びつくものであった。ここでは差しあたり、アメリカ国際関係学史の書き換えを牽引してきた——かつシュクラールと現実主義者たちの近さに注意を促している点でも本稿の議論と整合的な——ニコラ・ギロの立論を要約的に見ておくとしよう³¹⁾。亡命知識人を中核とした現実主義者たちは、啓蒙近代以来の精神こそが世界大戦と全体主義を導いたと説いて、人間社会を合理的に設計し統制しようとする世俗主義的な発想に否を突きつけることとなった。中世キリスト教の宇宙^{コスモス}であれ、18世紀の貴族主義的な文明意識であれ、人為的な計画に拠るのでない超越的な土台だけが、政治秩序の十全な担保を可能としてきた。けれども、19世紀へ入り国民国家が台頭してくるにつれて、個々の政治共同体がそれぞれに自らを道徳的に至高な主体だと唱え立てるようになった。その結果が、互いに妥協のない徹底した総力戦であった。自然科学的の思惟への信頼が高まり、すべてが脱魔術化されていくなかで、あらゆる問題は合理的なルールの下に解決されていくという幻想も見られる。しかし、人類は改めて、被造物として限界づけられた自らの非合理性を見据え、人間社会から除きえない権力のデモニッシュな性格を認識しなければならない。政治的な争いを抑えるにあたっては、人為の合理的な設計を超えてるものが必要なのである。そう説いて世界の再魔術化を模索した彼らは、いくらかはカール・シュミットに由来する政治神学的視座を（しかし今や桂冠学者として悪名を馳せていた彼には言及しないまま）支持し、神聖性を帯びて決断を下す主権者のあり方を展望したのだった。何が常態で何が例外なのかを画する決定こそが、実定的な法規に先立って政治的な秩序を保つ。そう思慮したところに描かれたのが、一部の支配層が専門知識に基づいて展開する対外政策決定の世界だった³²⁾。

『ユートピア以後』において活動的な生の没落を描いたシュクラールは、続く著作の題材に法万能主義^{リーガリズム}を選んだ。このイデオロギーの核心にあるのは、「法というものは政治生活から切り離されているだけでなく、たんなる政治よりもすぐれた社会的行動様式であるという信念」である³³⁾。そこにあるのは、政治理論を衰退させてきた要因だとコバンが見ていたのと同じ、技術合

理性への信仰であった。ところで、古典的現実主義者たちはしばしば、〈法的-道徳的アプローチ〉を退けて、政治における権力の重要性を説いたとされる。そうして彼らが権力を重視したその背景にあったのが、ギロの知見を整理する形で見た以上の論理なのであった³⁴⁾。だとすれば、彼らが展開していたのもやはり、技術合理性批判だったのである。モーゲンソーがその生涯で何度となく繰り返すこととなった〈科学的人間〉批判こそは、その典型であった³⁵⁾。

正確を期して言うと、シュクラーにとっては、(ジョージ・ケナンとモーゲンソーに代表させられる)現実主義者たちもまた、批判の対象であった。彼らは、原罪の観念までを持ちだし、人間の持つ限界を超えがたいものとする。結果、権力は人間の社会に遍く見いだされるものとなる。しかし、そうやって「政治の自立性」を主張する「現実主義者」たちは、「はっきりとリーガリズムや道徳主義に対する敵意を表明しているにもかかわらず、少なくとも一つの重要な信条、つまり、社会的経験は別個の区画にきちんと分類されねばならないという信条を、伝統的な法思想と共有している」。政治の領域を画定しようとし、そのために神学的な論理構成に依拠したまさにそのことを理由として、彼らの立論は現実から遊離する。ゆえにそれは、一つのイデオロギーにとどまらざるをえない。現実主義者たちに言わせると、人間は自らを理性で制御しきれる存在ではないのであり、人為の働きを超える独自の法則とメカニズムが権力にはあるという。ひるがえって彼らは、だからその法則を見極めた上でこの場合にはこうせよと説く。それは、今一つの別な形式主義にすぎない。彼女はそう理解したわけである。「現実主義〔は〕、政治的リーガリズム、正義の政策の最もがんこな偏見を強化するのに役立ってきている」³⁶⁾。

この批判の適否もここでは問うまい。重要なのは、こうした批判が成立した事実である。シュクラーの批判は、つまり、現実主義者たちの解決策は不十分だというものである。ひるがえって、現実主義者たちが自分と同じく技術合理性支配の世界に対峙しようとしているのだということを、彼女もまたコパンやウォーリンと並んで認識していたのだった。

20世紀前半の展開が改めて呼び覚ました人間の理性に対する懐疑と、そこに絡めて醸成されたヨーロッパ没落の感覚、これら二つを引きずりながら、冷戦期アメリカの国際関係論は開始されたのであった。ひるがえって、当時の論客たちは、未来を規範的に構想する術を改めて探りだそうとした。国際関係理論の探求とは、〈政治哲学の死〉にあつて国家間のやりとりを（専ら焦点にしてというよりは）視野に入れて推し進められるべき、新たな政治理論の模索なのであった³⁷⁾。文明としてのヨーロッパの没落と〈政治哲学の死〉とは、一体であった。これらの兆候を背中合わせの形で示していた国際的な事象は、両者の克服方法を探りあてようとした際、無視することが難しい主題だったに違いない³⁸⁾。

2. 前線としてのアメリカ

第二次世界大戦の後、人間がどこまで理性的な存在であるのかは、いよいよ疑わしいものとなった。人為が導きだす規範で未来を構想しうる可能性は、悲観的に捉えられた。自律した個人を理想的な主体として描き、そこから社会の絶えざる進歩を展望する自由主義は、土台を揺るがされるに至った。その自由主義にとって、共産主義との本格化していく対決は、長らく続けられてきた戦いのさらなる継続を意味した。

ただ、この自由主義は、同じ冷戦という状況下にあつて、アメリカによってこそ体現され守られるべきものともなっていた。1955年に現れたルイス・ハーツによる『アメリカ自由主義の伝統』は、この認識を最も直截に表現した著作だと言える³⁹⁾。アメリカは封建期を経ずに成立した「自然的自由主義」の社会である、ゆえに封建制への反応にその出自を持つ社会主義に対しては関心を示すことすらない。彼はそのように言う。しかし、こう述べるハーツは同時に、冷戦という固有な文脈を明確に意識してもいた。「世界との関わり合いは、共産主義との関わりがその例証であるように、われわれの

国内の自由の問題を、対外的な生活との関連で見なおさせることになったのである。それゆえ、アメリカにおける自由主義社会の発見をもたらすような、ヨーロッパへの往復旅行をわれわれに強いているのは、まさしく現代における危機そのものにほかならないのである⁴⁰⁾。ヨーロッパ最良の知が現地で解体してしまったかとも思われていたとき、代わってその存亡が賭けられる場となったのがアメリカなのであった。

このような理解の下において、ソヴィエト共産主義との戦いは、新たな全体主義との戦いに他ならなかった⁴¹⁾。ゆえに問題の核心も、ソ連の攻撃性それ自体よりは、目下共産主義に脅かされる形で問題となっている、自由主義の存否にあった。ハーツの見たところ、生まれつきに自由な社会として発展してきたアメリカが直面していた危機とは、——その歴史上ありえない封建的抑圧への「回帰」や共産主義の蔓延ではなく——内から開始される自由主義の絶対化、「意識されぬまま安眠を貪っている全体的一致の危険」だった⁴²⁾。ヨーロッパの自由主義がその内部の発展過程において経てきた葛藤を、アメリカは外部との関係を契機に潜り抜けようとしている。実にアメリカとは、「常に西洋に共通する問題が、見慣れない風変わりな形で現れる場所だったのである」⁴³⁾。

冷戦は、西洋近代史が昇ってきた（あるいは降ってきた）長い階梯の一段であった。だとすれば、冷戦が終わっても、状況が一変するわけではなかった。1967年に小篇「冷戦を論ずる」を記したモーゲンソーも、その末尾でこう述べている。「冷戦が終わった後も、権力の実質をめぐる争いは続くだろう」⁴⁴⁾。ただ、冷戦という文脈において、アメリカには確かに、この昇降の担い手として独特な役割が与えられてもいた。そこで賭けられていたのは、歴史のこの時点においてこの特異な共同体が担わされるに至っていた、一つの文明構想であった。先立つ1960年、モーゲンソーは次のようにも述べていた。「アメリカは、西洋世界のローマとアテネに、その遵法的秩序と文化の根源になったのである」⁴⁵⁾。

ヨーロッパ的伝統の没落を目の当たりにした亡命知識人たちはしばしば、

代わりとなる伝統をアメリカ史のなかに求め、あるいは創作した。アメリカ独立革命をフランス革命から区別して、ローマからモンテスキューを経てジェファソンらへ至る流れにその史的位置づけを見たアーレントの試みなどは、そうした思索の特徴的な一例だと目される⁴⁶⁾。シュクラールにもまた、同様の側面は見られただろう。『ユートピア以後』での問題意識を掘り下げる途上で彼女は、ルソーとヘーゲルを経た後にやはりモンテスキューへ至り、『アメリカのシティズンシップ』（1991年）と題された書も著したのであった⁴⁷⁾。

国際関係を盛んに論じた人々もやはり、アメリカの伝統へ目を向けた。同朋へのメッセージ性が豊かな『アメリカ史のアイロニー』（1952年）で、ニーバーは次のように述べている。「確かにアメリカは、自己評価においてもかなりのヨーロッパの国々の想像においても、啓蒙主義において頂点に達した近代の希望の妥当性の証明であった」⁴⁸⁾。モーゲンソーもまた、建国の父祖たちの伝統を語り、国益と勢力均衡に対する関心をそこに見ることとなった⁴⁹⁾。しかもそれは、ヨーロッパの伝統に由来するものでもあった。「合衆国は特定の目的を念頭に置いたネーションとして設立された」歴史上「唯一の」国であったが、その「アメリカの目的を表現してきた理念とは、古代・近代ヨーロッパの理念なのである」。続く箇所では、この理念は、国内において誰もが自由であり対外的には安全であることとされ、それはハーツによっても論じられたものだと説かれる。その上で、古代の国制を復活させようとしたイギリスの革命と異なり、アメリカの革命は新しく秩序を創設しようとしたものであって、ヨーロッパ的伝統を実現していくそのやり方にこそ、アメリカの特殊性もあるとされる。この国に認められてきたのはまさに、絶えず変化していこうと未来を臨む文化なのである。「他の社会が永遠を求めてピラミッドや寺院を建てたところで、私たちの社会は、また別の日へ向けて建てるべく、明日のためにと〔かつて〕建てたものを打ち壊すのである」⁵⁰⁾。〈政治哲学の死〉という思想史的な認識を、折々の現実政治をめぐってはこの地に投影して語る——モーゲンソーがだした論文集の多くでアメリカの語

が題字に含まれている事実には、彼の問題関心のあり方が浮かびあがっているように見える。

ヨーロッパに始まった〈政治哲学の死〉は、今やアメリカにとって自らの存否に関わる問題であった。ニューバーにしてもモーゲンソーにしても、民衆が政策決定に与える影響を抑え込もうとはした。しかし、自由主義からはみだすことのないところで、自らの主張を推し進めようとした⁵¹⁾。問題は、自由主義か否かではなく、どの自由主義かへと帰着していく。〈第二の論争〉へ至る時期にまで時間を進めていくことで、この点はより明確に浮かびあがってくるだろう。

3. 問題のアメリカにおける変容

(1) 啓蒙近代の巻き返し

国際関係論は、より広範な射程を持つ政治理論の一部だった。固有な分野としての国際関係論が未確立で、政治学自体の専門分化も進んでいなかった時代、国際関係をめぐる思索は政治理論そのものとして展開されていたのである。政治理論を他の政治学諸分野から区別する慣行は、そもそも行動論以後の産物である。分野のあり方を振り返るにあたり、当該分野が一定の独立性を勝ちとった後で自らを飾り立ててきたその物語に乗りかかるというのは、いかにも不手際なやり方だろう。先立つ時代を生き〈古典派〉とも呼ばれてきた論客を一個の政治思想史家ないし政治理論研究者として読むというのは、歴史学的に見ても妥当である。モーゲンソーやニューバーといった人々は、国際政治ばかりを論じたのでもなかった。20世紀半ばという時代、国内事情も国際事情もともに、近代社会が抱える問題との関係から読み解かれる理由があった。アメリカにおいてはなおさらであった。国際関係論にとって冷戦が持った意味は、アメリカ国内社会にとってのそれと一体であった。

国際社会を対象とする政治の理論は、戦後のアメリカで発展を見た。その

背景にあったのは、全面的にアメリカ固有の主題ではなかった。あるいは、冷戦それ自体に発した主題でもなかった。それはむしろ、冷戦を機にその最前線アメリカを触媒として具象化されることとなった、西洋精神史上の主題だった。ただ、そこにおいて、〈政治哲学の死〉はアメリカ的な形に翻案されてもいっただろう。実際にはアメリカに固有な問題が、この標語の下で普遍的な装いをまというようにもなっていく。

一般に〈古典派〉とは区別されるウォルツらの世代へと移っていくと、この点が顕著になる⁵²⁾。思索の手順においても導きだしている結果においても、古典的現実主義と構造的現実主義とは様々に異なる。しかし、理論を求めるといふ営みにおいてもそこで前提とされた思想的問題意識においても、少なからず共通する面もまた両者にはあった。

古典的現実主義者たちの視座が政治神学的なものであった点は、ギロを手掛かりとして触れた。その彼が描いている歴史には続きがある。既に触れたとおり、現実主義者たちの政治神学的な視座は、自由主義への批判を軸としたものであったにも拘わらず、自由主義国家アメリカで広められなければならなかった。そこで古典的現実主義者たちの議論は、行動論、次いでサイバネティックスと、合理主義的思惟からの反撃を受ける。結果、その本来の決断主義的な理念も掘り崩されていく。その帰結こそがウォルツの構造的現実主義であった。個々の人間は非合理的かもしれない。しかし、神学を持ちだすには及ばない。集団としての合理的な決定は、人間がその過程を設計し組織することにより可能である。国際社会の構造こそを戦争発生の基本条件と説く彼の理論では、土台を明確な所与として措定することができる。そこで主権者が行う政策上の決断は、その土台に適するよう設えられた合理的ルーティンに基づく。そうして人為の世界は、機械的な選択へと回収されるのであった⁵³⁾。

かつてこのように普遍的な問いが示されそれに対しこのように応答が重ねられてきた、という形で描かれる政治思想史の通史なるものは、結局のところ何かしらの仮構である。したがって、そこで古典と位置づけられるテクス

トにしても、冒されざる真理を語っているかのごとき神秘的な装いを要する。しかし、世俗化が進展を見るなかで、神秘的なものは並べて座を奪われる。とって代わるのが実証である。今や自由主義の下で社会の全体像は自明である、日々の具体的事象だけが問題なのだ、と説いたプラグマティズムこそは、そうした理路が20世紀前半に至り着いた一つの到達点であった⁵⁴⁾。とは言え、産業化と大衆化の波を経た大戦間期のアメリカは、同時期のヨーロッパに劣らず近代の世でもあった⁵⁵⁾。そうした潮流を抑え込むかのようにとにかくもプラグマティズムを正統として抱えてきていたアメリカにおいて、新たな全体主義の到来を機に勢いを増した古典的現実主義者たちの道とは、一つの反動だったとも言える⁵⁶⁾。しかし、その反動もまたここに押し返されていく。合理的に選択を為す自律した主体の概念を改めて前提へと据えた行動主義、さらには合理的なシステムだけが存在するのだというサイバネティックスとは、プラグマティズムの伝統を取り戻して啓蒙近代からの連続的進歩をなお信じようとする、アメリカ正統の論理なのであった⁵⁷⁾。

国際関係論の通俗的な学説史に言う〈第二の論争〉も、こうした思想的せめぎ合いの現れであった。この分野において〈伝統派〉ないし〈古典派〉から〈科学派〉への移行として語られる言説が展開されていたのは、ダニエル・ベルが「イデオロギーの終焉」を説いたまさにその時期であった。彼もまた、ファシズムやホロコーストを念頭に、1930年代以後を「有史以来、特に緊張した時代」とする。そうして、フランス革命以来展望されてきた道が今や行き詰まりを迎えたのだと主張する。この思想史像は、一見して〈政治哲学の死〉のそれと近縁性がある。ただ、そこで主として問題とされていたのは、文字どおりに——説得の武器としての——イデオロギーであった。ウォーリンに言わせれば、シュクラーや古典的現実主義者たちにしたところで、その点は同じだったのかもしれない。しかし、反マルクス主義的な信条を土台としたその議論は、概してより近視眼的であった。著者自身に言わせても、「イデオロギーの終焉とは思想的にいうなら……社会変動に対する安易な「左翼的」公式の書物を閉じることにすぎない。しかも彼は、この動き

を肯定的に扱う。ヨーロッパの思想的伝統に対する危機感は、そこではせいぜい表面的なものである。代わりに見られるのは、漸次の微調整で進む、来るべき社会への期待である。混合経済と分権的統治機構が妥当である点には、今や合意がある。そうして「ふるい黙示録的な千年王国のヴィジョンを思想的に拒否してしまった現代の政治社会の枠組のなかで、これまでの過去の論争から学びとることをせず、足場となるべき確かな伝統をもたぬあたらしい世代があたらしい目標をみずから追及しているのである」⁵⁸⁾。階級闘争と革命など経る必要はない。自由主義という土台を(恒久的に)保ったままで、社会は漸進し続けていくことが可能なのである。

大まかな図式を描くとすれば、こう整理しうるかもしれない。まず、当時の政治思想史家らに見られた悲観的展望を共有しつつも、自分たちが生きる時代において新たな出発点を設定しようとしたのが、モーゲンソーや(『ユートピア以後』より後の)シュクラーであった。対して、この悲観を逃れ去り、もはや規範理論は不要ないし有害との極へ突っ切っていったのが、〈科学派〉であった⁵⁹⁾。問題は主体ではなくて土台なのだと説くウォルツは、行動論との関係で言えば、むしろ批判者に位置した⁶⁰⁾。しかしその延長上にある〈科学派〉の一員としてこそ、彼は国際関係論コミュニティーにおいて燦然たる地位を占めていった。だとすればそれは、脱行動論へと進む政治学のなかにあつて、しかし行動論の基本的な理念自体はなお果たそうとする道筋を、彼の理論が提供していた(と見えた)ためだろう。

(2) 多様性への不安

この意味において、ウォルツの試みもまた、自由主義と合理主義を擁護しつつ新たな政治の理論を構築することはいかにして可能かという問いへの、一つの応答であった。こうした思想傾向の精神的な背景を捉えるべく、ここで政治理論一般へ目を向けてみよう。すると、ウォルツとともに国際関係論が転回を成そうとしていたそのとき、この領域にも転機が迫りつつあつた

ことは、見落とすべきでない。ここで指しているのはつまり、構造的現実主義と前後する形でロールズの正義論が現れた、その事実である⁶¹⁾。

1924年生まれのウォルツと1921年生まれのロールズとは、年齢の面でも同世代に属する。ひるがえって、二人とも、自身の思想を世に問い始めたのは、ラズレットが〈政治哲学の死〉を叫んだ1950年代のことであった。ウォルツは1954年の博士論文を基に『人間・国家・戦争』を1959年に出版し、それを発展させていくなかで1979年の『国際政治の理論』へ至る。ロールズの方は1949年に博士論文を書き終えると、「二つのルール概念」(1955年)や『公正としての正義』(1958年)で自らの構想を固め、『正義論』(1971年)へと辿り着く。

現実主義者と行動論者が政治哲学の要否を争っていた裏で、二人はともにそのどちらとも別の道を模索していた。結果、彼らが導き出したのはいずれも、これら双方の学知を折衷し組み合わせるような道であった。一方のウォルツが、現実主義的な装いを保ちつつ〈科学派〉的な一般理論を構築したのだとすれば、ロールズの方は、経済学的な論理を多分に組み入れながら体系的な規範理論の体裁を拵えるのである。

文脈を確認しておこう。彼らがそれぞれにその主著を公刊した1970年代、政治学も新たな状況へ入っていた。1960年代も終わりに近づくと、デイヴィッド・イーストンが脱行動論を宣言し(1969年)、ウォーリンが政治理論の使命を再定義していた(1968年)。思想への関心はここで、政治学に復権を見るかとも思えた。だが行動論は、反省が行われるくらいに定着もしていた。そこで現実に進んだのは、「政治理論の疎外」(ガネル)だった。初期シュクラの悲観的な見通しを批判して政治理論の新段階を展望しようとしていたあのウォーリンこそが、政治理論の隔離を迫認する——思想と実証とは、それぞれの使命を持つ別個の分野となるのである⁶²⁾。アメリカにおける政治学の現状を省みても、こうした分断がその後今日まで続いてきた様子は、容易に見てとることができる。

ロールズの政治哲学は、このような時代の申し子であった。その試みにい

くらか好意的な論者に言わせても、『正義論』という書は、「極端に長く、うまく組み立てられてもおらず、スタイルの面でも秀でたところがない本」である。にも拘わらずそれは、ニューヨーク・タイムズ紙で今年の一冊に挙げられる榮譽をも獲得した。その理由はこうである。「大学院の「方法論」科目を通じ短絡的な論理実証主義でしつけられた多くの社会学者にとって、ロールズが極めて刺激的だったのは、「価値観」の問題について600かそれ以上の頁にわたり合理的な議論を続けうることを彼が示したことにあった」⁶³⁾。ゲーム理論をはじめ、彼らが馴染んでいた社会科学的不いしは経済学的な知見もまた、この書にはふんだんに含み込まれていた。

そこで同書は、〈政治哲学の死〉を克服したものだとの評価を受ける。ただ、この評価は、それが正しさについての込み入った論理を提示していたという限りでのみ妥当である。普遍的な正義を唱えたその中身は極めて非政治的でもあった。そして、この点においてこそ、ロールズとウォルツ、さらにはそれぞれの論理に向けられた批判のあいだにも、近縁性を認めることができる。

道徳律は経験的でなく定言的でなければならないという前提と、人間は手段でなく目的として捉えられなければならないというその具体的一掃結、この二つをカントから受け継いだロールズは、人間を頭数で捉え社会の福利を快樂の量に還元する功利主義に対し抗いを示す。そこから彼が自由と平等の両立を軸とする正義の二原理を導きだしたことは、政治学や倫理学に携わる者を中心としてよく知られたところだろう。社会を構成する個々人は多様な善（価値観・目的）を有する。その多様性を保ちつつ共同体を成り立たせようとすれば、個々の事情を超えた一般的な原理を要する。とすれば、正義とは、各人が偶然的に置かれている現状を括弧に入れたとしても妥当するものでなければならない。そこで導入されるのが、改鑄された型の社会契約論である。無知のヴェールを被った個人ならどのルールを選ぶかという実験が、ここに持ちだされる。

正義をめぐるロールズの一般理論は、このような抽象化された人間を想定

することではじめて可能である。政治の始まりには他者がいる。しかし、普遍性のために彼はその他者を贅に捧げる。ヴェールを被ったロールズ的な人間を「負荷なき自己」と呼んだマイケル・サンデルをはじめとして、いわゆるコミュニタリアン共同体主義者たちが批判を投げかけたのも、この点であった⁶⁴。現実の人間は常に何かしらの具体的な意味秩序を生きている。だとすれば、このような思考実験で導きだされた最大公約数的な正義とは、折り合いのつけがたい個々の多様性を等閑にした結果ではないのか。客観的であることが標榜されている正義にも、ロールズ自身の——あるいは彼の生きる社会に典型的な——価値観が滑り込まされているのではないか。ある批判者に言わせると、彼の理論においては、どの社会も「ますます、アメリカ合衆国のようになることを宿命づけられている」⁶⁵。どこであれ社会はその土台において似ている。ゆえに、場所を違えても効果の変わらぬ技術で政治は統御される。人間自体がどこでも変わらない。理性の僕のごとき自我の半自動的な選択を軸とするこの理論は、政治を何か標準化された手続きに基づく絶え間ない機械修理のように見る。この感覚は、実証科学が抱え持つそれである⁶⁶。

ロールズの正義論に認められるこの非政治性こそは、ウォルツの構造論を特徴づけるものでもある。その構造的現実主義においても、他者には居所がない。全体を覆う平板な構造のなかでは、どの主体もが等質の単位ユニットへと還元される。無政府の構造は、外部のない全体である。物理的空間ないしその意味づけの仕方に限った話ではない。時間の流れにおいてもそうなのである⁶⁷。後に構造的現実主義が批判にさらされると、一方では歴史的視座の再興が叫ばれ、他方では文化とアイデンティティーを標語に他者表象の問題が湧きあがった⁶⁸。不変の無政府的構造という概念が分野を席卷したことの、それは自然な帰結だった。

フルガリテイ 質素・パーシモニー 儉約を美德とする理論は、知的な爽快さをもたらす。しかし、結局のところそれは、よくわからないものと対峙し続けるという、集団を生きる人間が抱え持つ苦悩を、覆い隠し忘れさせるがためにすぎまい。ロールズが政治哲学の復権と評されたことと、ウォルツが政治的現実主義の深化と

囃されたことの共時性は、曖昧さや偶然性を忌避する強迫的な時代精神を背後にうかがわせる。

ひるがえって、そうした論理が生みだされたのは、まさにそれが必要とされていたためだろう。この時期、アメリカが元来含み持ち、また自由主義社会が容認せざるをえない多様性は、いよいよ顕在化して社会のまとまりを脅かしつつあった。公民権運動は、その一つの現れであった。ベトナムが掻き立てた戦争責任の問題も、社会を分断するようになっていた。これら二つの危機は、アメリカ自由主義の基礎にある法万能主義の危機でもあった。公民権運動とは、既存の法が提供すべきものを提供していないとしてその客観性に疑義を投げかけるものだったし、ベトナム戦争が非難を受けたのは、それが法を逸脱する力の論理だからだった⁶⁹⁾。

そのような時代にあって、自由な人々の集合体であるべきアメリカをなお単一の社会として想い描こうと共通項を模索し、かつそれだけに法万能主義に見られる形式主義的な思维様式は維持しようとした際、その使命を果たしうる方途こそがロールズのやり方における正義の構想だった。「それは、意見の一致がえがたかった時期に、合意の可能性を請け合ったのだった⁷⁰⁾。自由主義の存亡が他国との関係に表象される形で賭けられていた時代、このような精神はただちに国際社会にも向けられることとなった。その精神を象徴的な形で体現したのがウォルツだった。そこでモーゲンソーらの世代が構想した強権的な主権者の像は捨てられ、より民主的ないし平等主義的な社会像が導きだされるに至る。1970年代はちょうど、多極化が進み南北問題が争点としての重要性を増してくる時期でもあった。ソ連全体主義の脅威は相対的に薄れていたかもしれない。しかし、西側的/アメリカ的/ヨーロッパ近代的な世界像の普遍性は、それだけ不確かなものになりつつもあった。ウォルツが自らの理論の基礎を築き始めたのは、二極対立が世界の構造として形をとるようになっていった頃だったかもしれない。しかしその自由主義的な一般理論がそこから深められ完成を見たのは、二極対立が頂点にあったのではない時期であった⁷¹⁾。

(3) 〈政治哲学の死〉が支える「アメリカの社会科学」

民主政社会で原子化した個人は、思考の手間を省こうと一般観念に飛びつく。しかしアメリカの場合、この傾向は、制度と習俗で和らげられている。19世紀の半ば、トクヴィルはそう述べていた⁷²⁾。しかし、そのアメリカが今や、一般理論へ向けてひた走る。これはつまり、土台の自明性が失われていったその帰結に他なるまい。同じトクヴィルや先のハーツを典型に、アメリカ自由主義の伝統はしばしば、ピューリタニズムに始まるものと論じられてきた。この地には常に、偽りを忌避し透明さを希求する傾きがあった。全体主義と冷戦の時代、その精神はまず、客観的データを賛美する行動論に現れた⁷³⁾。一方、ビッグス湾からウォーターゲートへと移りゆく現実、再び理想を裏切りつつあった⁷⁴⁾。ポスト行動論の時代、今また新たな透明性が必要となる。多様な善に優先する絶対的な正の確定と、個々の国家の意志を超えて状況を規定する構造の想定、そこで共通に抱き持たれていたのは、そのあり方を見紛うことのない透明な全体像への憧憬であった。

ロールズやウォルツの台頭と前後して、現下の国際関係論は「アメリカの社会科学」にすぎないとの批判が現れる。その最大の担い手ホフマンによれば、この思惟様式の特質もこの点にあった。曰く、アメリカ国際関係論を推し進めてきた精神的な傾向として「最も際立っているのは、確実さの探求である」⁷⁵⁾。この主張が行動論以降の科学主義を指して為されているというのは、今日も広く理解されているとおりでだろう。ただ、同時代の現実をうまく説明できないから、というだけがそこでの企図ではない。彼もやはり、〈政治哲学の死〉と対峙していた。

確実さへの欲求を批判するに先立ちアメリカ国際関係論の来歴を辿る段で、ホフマンがまず俎上に載せているのはモーゲンソーである。彼の議論は「傲慢」であるというその評価の意味するところは、この語の字面だけからはわかりにくい。ただ、続けて、そのモーゲンソーの考え方が広まった理由

に「科学の実践的適用によって進歩がもたらされるという確信」が挙げられ、さらにその背景には「確実性を求める気持ちや大惨事とトラウマを避ける確実な方法を見つけ出したいという望み」が指摘される⁷⁶⁾。これらの文言まで踏まえて捉えたとすれば、ホフマンが言うところの傲慢さとは、その決定論的な性格、つまりは形式主義的な傾向を指しているものと解される。

実に、国際関係論の現状を嘆くホフマンの口ぶりは、法万能主義を評するシュクラーのそれとそっくりである⁷⁷⁾。彼自身が指摘していたところによれば、1977年の「アメリカの社会科学」批判とは、1950年代の終わりに記した論文を発展させたものである⁷⁸⁾。ではそこで彼は何を説いていたのだろうか。曰く、政治における権力の不可避性を人間の本性的な衝動に帰する現実主義者たちは、「世界を、権力関係が永続的な単調さで再生産される生態的な領域とみなし」、「害悪の多くは、人間の罪深さではなく、善人さえ利己的・非道徳的な行動を強いられる文脈、配置、状況に根差している」ことを閑却してしまっている。結果として彼らは、すべてが人為の外で決定されている「反動的ユートピア」に安んじているのであり、現状の変革可能性を考える「規範的作業からの逃避」を企てている⁷⁹⁾。シュクラーに言わせると現実主義者とは「絶望している自由主義者」だったが、ホフマンの語彙だと彼らは「絶望にもとづく勧告」の主唱者である⁸⁰⁾。

批判的なのはやはり形式主義なのである。人間を本性的に非合理とする決定論に与したならば、「合理的な人間の行動に関する合理的な理論が存在しうることを理解できなくなってしまう」。絶えず移ろいゆく現実の人間社会から逃れ去ってしまおうとする同じ傾向を理由として、モートン・カプランらのシステム論もまた——シュクラーを先取りするような言葉遣いで——批判されることとなるだろう。「現実政治と絶縁した純粋に科学的な政治学は、実定法から離れた純粋法学理論と同様に拒否すべきものなのである」⁸¹⁾。ホフマンもまたシュクラーと同様、〈古典派〉と〈科学派〉とを同じ穴の貉と見ていた。ただ、学界の趨勢が変化したことで、1977年の論文では後者への批判がより前面にでているのである。その上で、では何が必要か。必然、超越

的なものに飛び乗ることなく、現実の人間が——〈政治哲学の死〉を乗り越えて——未来を規範的に構想する態度である。「われわれの任務は、望ましい世界の目的が何かを言うことであり、自分たちの「ユートピア」が示唆するものを説明することである」⁸²⁾。

そうして科学的国際関係論に批判が投げかけられていた頃、ロールズの正義論も——本人による『万民の法』(1999年)を待つまでもなく——チャールズ・ベイツによってこの分野へ導き入れられることとなる⁸³⁾。それに対してもやはり、ホフマンが批判の急先鋒に立つだろう。あたかも富の配分システムさえ完成させればよいと言わんばかりのその抽象的な純理論的志向ゆえに、ロールズと「ベイツの議論は[ロバート・]タッカーが言うように、「歴史の全面否定」であるのみならず、政治のまさに本質的部分をも否定するものだと言ってよい」⁸⁴⁾。ウォルツ的な思惟とロールズ的な思惟とは当然に、同じ人物から同じ型の批判を受けるのであった。

おわりに

戦後アメリカの国際関係論は、冷戦の個々の出来事(のみ)によって形づくられた代物ではない。その背景にほとんど一貫してあったのは、20世紀前半の諸情勢が醸しだし広めることとなった、〈政治哲学の死〉の意識だった。冷戦とは、自由主義的近代をめぐる危機が見せた展開の一場面であった。そこにおいて、大陸の伝統を特異な形で引き継いでいたアメリカには、この危機を乗り越える固有な役割が与えられていた。その冷戦期アメリカにおいて発展を見ることとなった国際関係論というのは、今なお政治について規範的ないし理論的に考察し行動することは可能なかと問う学問領域であった。当初の問題意識それ自体は、少しずつ忘れられていったかもしれない。また、元来ヨーロッパ的伝統の危機を表明したその標語は、いくらかアメリカ固有なものに置き換えられてもいっただろう。そこにこそ、国際関係論に冷戦が与えた影響はあったのかもしれない。しかし、先達たちの理論を引き

継ぎまた修正する作業が進められていくなかで、元の問題もまた国際関係論の基底に流れ続けることとなった。昨今、国際関係論と政治理論ないし政治思想史の再会も言われる⁸⁵⁾。しかし、前者はそもそも後者の一部として展開され続けてきたのである。

通俗的な学説史において、続く1980年代の動きは、二極対立の漸進的終焉と絡めて説明されてきた。しかし、その内実も、このような精神史的文脈に照らせばこそ理解される面がある。当時の国際関係論においては、権力政治的な世界像と並んで近代なるものもまた批判にさらされていたのである。実にポスト実証主義者たちは、しばしばほぼ互換的に、ポスト近代主義者とも呼ばれたのであった。

フランスではコジェーヴのヘーゲル解釈がポスト構造主義者たちへ流れ込んでいったように、ポスト近代への胎動は20世紀半ばにはあった。アメリカもその外にいたわけではない。ハーツやベルの議論が知識人のあいだを席卷し、ウォルツとロールズが研究者としての基礎固めを行っていた1950年代、文芸こそが政治のあり方を表現すると説いたのは、(アーレントやベルと並んでニューヨーク知識人と呼ばれた)批評家のライオネル・トリリングである⁸⁶⁾。その同じ1950年代の終わり頃、アメリカ・ポスト近代文学の代表作は既に現れていた。「ある意味で、ぼく、ジェイコブ・ホーナーだ」の一文から開始されるジョン・バース『旅路の果て』(1958年)において、自由の国アメリカを生きるのは、理性で統合された確固たる自我などというものを信じるのではない分裂した主体である⁸⁷⁾。

その後もアメリカの大勢は、ウォルツとロールズの道を選んだ⁸⁸⁾。1970年代の理論家たちは、〈政治哲学の死〉を克服したかのような仮構をつくりだした。前後して、大陸の思想も流入はしてくる。そもそも公民権運動やベトナム反戦運動は、特に後者が学生運動とも絡み合って展開されたように、それ自体が近代への抗いと言うべき側面を持っていた。

続く1980年代に何人かの理論研究者たちが一群の現代思想を国際関係論に持ち込もうとしたとき、彼らもまた伝統を問いなおすところから始めた。

『ミレニアム (Millennium)』誌 1988 年の国際思想を扱った特集でジェームズ・ダー・デリアンが記した序論には、この様子がありありと示されている。「分野における思想の「伝統」を形づくり司っているまさにその言葉・概念・方法・歴史……を疑問に付す認識論的批判を、国際関係論は経験している」。その意味するところとは何か。それは「近代の「危機」に他ならない。客観性への信頼、あるいはその前提にある主客の分離や自律した理性的主体といった概念が、近代の産物である。「本号に共通のテーマは、啓蒙の伝統を反省する姿勢である」⁸⁹⁾。似たような言葉遣いは、ジム・ジョージの立論にも見られる。既存の国際関係論は、「複雑な激動の世界を型にはめられ厳密に秩序立てられた理解枠組みへと還元する」のだが、それは、「ルネサンス以後のヨーロッパの歴史経験をめぐる特定の表象に由来し、英米哲学正統の用語で言い表された」ものなのである⁹⁰⁾。ポスト構造主義国際政治理論を奉ずる代表的論客の一人 R・B・J・ウォーカーが、現実主義を中核とする主流の国際関係論を批判する際、同時に近代的な思惟様式を退ける意味でマキアヴェッリを標的に据えているのも、やはり象徴的な例だろう⁹¹⁾。冷戦が終わろうとし、アメリカが近代の頂点にして擁護者の位置に立つ世界像が転機を迎えようとしていた時期は、啓蒙近代への異議を差し挟みなおす好機でもあった⁹²⁾。

しかし、ウォルツやロールズの論理からしても、ポスト近代の主張は封じられるべきものであった。まもなく構成主義が台頭し ウィア・メディア 中道 を掲げるに至り、問題を全面化させ土台を根底から問いなおそうとする動きは、再び阻まれることとなる⁹³⁾。本稿の導入部で「歴史の終わり」論に触れた。あの論理もまた、ヨーロッパ近代の危機に対するアメリカ的な反動の一変種だっただろう。コジェーヴとシュトラウスの教え子アラン・ブルームに学んだフクヤマは、戦間期ヨーロッパから戦後アメリカへと引き継がれた思想史像を、その新たな画期において再演したのである⁹⁴⁾。ただ、冷戦の終結をもって歴史の完成を語るフクヤマの場合、とりわけ 20 世紀後半以後の世界にむしろ近代的理性の再生を見るのであって、ゆえに現実主義的な思惟様式にも歴史と

ともに終わりが宣告される。ニーチェが近代科学の行き着く先に見た「最後の人間」が持つ傲慢さすらもが、完成された人類の肯定的な要素となる。フクヤマの著作が持った論争的性格は、先達の歴史観を引き継ぎながらその帰結は挿げ替える巧みさにあつて、それ自体が優れてアメリカの知的文脈に固有なものだと言える。そこにある自由主義的近代擁護への半ば強迫的な志向は、デューイからロールズとウォルツを貫いてこの社会に持続してきたものである⁹⁵⁾。

自由主義近代への反抗が企てられたかと思えば、それを押しとどめようとする動きが現れる。アメリカに託され、またその存亡が賭けられた自由主義は、そうして命脈をつなぎ留められる。しかし、表面ばかりを繕われるジェイコブ・ホーナー的な自我は、不可視性を増していく抑圧にますます耐えられなくなってもいく。今日この動きが、政治思想史においてはグローバル知性史へ至るのだとすれば、国際関係論においては非西欧型国際関係論の台頭と学知の「終わり」に対する宣言を帰結する⁹⁶⁾——古典的現実主義とポスト実証主義の結末に鑑みたとき、結局のところ既成の枠組みを仮想敵とすることに躊躇がないこれらの試みが自らの企図を達成しうるのは、大いに疑わしいところではあるのだが。

注

- 1) フランシス・フクヤマ『歴史の終わり（上）』渡部昇一訳、三笠書房、1992年、15頁、ただし原文を参照の上で訳文を変更した。
- 2) こうした解釈ないし断定的主張の好例は、概ね1980年頃から数を増していった言説に認められる。そこで構造的現実主義は、冷戦の論理であつて、ゆえに変わりつつある世界を説明することが困難だとされた。たとえば、Ernst-Otto Czempiel and James N. Rosenau eds., *Global Changes and Theoretical Challenges: Approaches to World Politics for the 1990s*, Lexington Books, 1989; Peter J. Katzenstein, Robert O. Keohane and Stephen D. Krasner eds., *Exploration and Contestation in the Study of World Politics*, MIT Press, 1999.
- 3) 政治学史一般がしばしばこうした紋切り型に陥ってきた点は、ジョン・ガネルが指摘して久しい。ジョン・ガネル『アメリカ政治理論の系譜』中谷義和訳、ミネルヴァ書房、2001年。国際関係学史の見なおしも同じ問題への批判から進んできたことは、ガネルの教え子で彼の方法論を国際関係論に持ち込んだブライアン・シュミット

の例に見やすい。Brian C. Schmidt, *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations*, State University of New York Press, 1998.

- 4) 学術領域^{ディシプリン}の固有な境界を設定することが知とそれに伴う行動の規律^{ディシプリン}に通ずるとの趣旨で、しばしばフォーコーの権力論を引き合いに学説史の現状維持的な力をめぐって展開されてきた議論を、ここで繰り返すことはしない。差しあたり、この問題を軸に政治学史学の変遷を俯瞰した研究として、Robert Adcock, “A Disciplinary History of Disciplinary Histories: The Case of Political Science,” in *A Historiography of the Modern Social Sciences*, eds. Roger E. Backhouse and Philippe Fontaine, Cambridge University Press, 2014. 同じ争点をめぐる国際関係論での議論状況は、Duncan Bell, “Writing the World (Remix),” in *Historiographical Investigations in International Relations*, eds. Brian C. Schmidt and Nicolas Guilhot, Palgrave Macmillan, 2019.
- 5) 特に行動論イデオロギーが持った冷戦戦略上の意味をめぐっては、多くの研究が重ねられてきた。比較的早い時期のものとしては、たとえば、Michael E. Latham, *Modernization as Ideology: American Social Science and “Nation-Building” in the Kennedy Era*, University of North Carolina Press, 2000; Ron Robin, *The Making of the Cold War Enemy: Culture and Politics in the Military-Intellectual Complex*, Princeton University Press, 2001. 社会諸科学を広く扱った最近の例としては、Mark Solovey and Hamilton Cravens eds., *Cold War Social Science: Knowledge Production, Liberal Democracy, and Human Nature*, Palgrave Macmillan, 2012.
- 6) 関連文献は枚挙にいとまがない。本稿のテーマと関連するところから特に最近の一例を引くと、第二次世界大戦期から冷戦期にかけてモーゲンソーの地政学的見地が辿った変化について、Curran Flynn, “Political Geography and Morgenthau’s Early American Works,” *Cambridge Review of International Affairs* 29-4, 2016, pp. 1582–1602.
- 7) このように問題を設定しても関連しうる文脈は無数にありうる。本稿では、射程を限定する目的から、国際関係論（の理論家と言われてきた人々の思索）の展開と政治理論をめぐる潮流との並行関係を主軸に据える。その上で、本稿では、これら学知の流れを鳥瞰することに重きを置く。そのため、特に知見が積み重ねられてきている論点については、細かな解釈論争に踏み入ることは避けて代表的な二次文献を通じて確認することとし、とりあげる一次文献も代表的なものを例示的に引照するにとどめる。したがって、触れられてしかるべき数多くの理論家たちが、本稿の検討対象から漏れることとなる。なお、本稿では論争的な語には引用符以外でも山括弧ないし鉤括弧を付しているが、本稿の議論がその語の通例の用法から外れている面があるかその論争性に強いて注意を喚起している場合には前者、そうでない場合には後者を用いている。また、引用に際して日本語訳がある場合は原則としてそ

の書誌情報のみを示し、議論の中身に関わる場合に限り原書の刊行年を添えた。

- 8) フクヤマ『歴史の終わり(上)』25頁、ただし原文を参照の上で訳文を変更した。
- 9) ヴァンサン・デコンブ『知の最前線——現代フランスの哲学』高橋允昭訳、TBSブリタニカ、1983年、19頁。
- 10) たとえば次の一節に、この点は色濃い。「自然的な静的-所与-存在(Sein)として捉えられた実体が(自己自身との)同一性を存在論的基盤とするならば、この存在と自己自身とを開示する言説の主体すなわち人間は、否定性をその究極の基礎とする。ところで、自己の存在自体において否定性に支配されている人間は、静的-所与-存在ではなく、自己を指定する、もしくは自己自身を創造する行動或いは活動である。人間は出発点となる所与存在の否定により「媒介」されて結果を得る「弁証法的運動」として初めて客観的に実在するものとなる。この否定性は存在の中で存在の同一性に結び付けられながら、ほかならぬこの存在を主体と客体とに分離し、自然に対立する人間を創造する。だがしかし、この否定性はまた自然の只中に人間的現存在としても実在化され、言説とそれが開示する存在とが「一致する」真の認識において、そしてこの真の認識により、この主体と客体とを改めて再統一する。したがって、真なるもの或いは開示された存在は……自然に人間が対立することから始まり、そのような自然を人間が語り、行動によって「否定」していく長い活動の過程の結果である」。アレクサンドル・コジェーヴ『ヘーゲル読解入門——『精神現象学』を読む』上妻精/今野雅方訳、国文社、1987年、362-363頁、ただし強調は省略した。
- 11) ただし、フクヤマ自身、承認の問題を乗り越えた人間は欲望を追うだけの動物と化すというテーゼをもコジェーヴから引き継いでいたのであり、ゆえに「歴史の終わり」以後の世界を停滞し鬱屈したものになると見ていた。「歴史の終わり」以後の世界が持つこうした側面を診断するにあたり、フクヤマも引き合いにだしている文献として、マーク・フィッシャー『資本主義リアリズム——「この道しかない」のか?』セバスチャン・ブロイ/河南瑠莉訳、堀之内出版、2018年。コジェーヴとフクヤマの異同については次も参照。坂井礼文「歴史の終わりと主体の問題について——フクヤマ、コジェーヴ」『研究論叢(京都外国語大学)』84巻、2014年、225-243頁。
- 12) 否定的なもの・非存在・死は、現代思想に繰り返し現れる主題だが、それらが幼時以来コジェーヴの哲学的生を貫く関心事でもあったことは、次の評伝に詳しい。ドミニック・オフレ『評伝 アレクサンドル・コジェーヴ——哲学、国家、歴史の終焉』今野雅方訳、パピルス、2001年。フランスにおけるコジェーヴ以後のヘーゲル像の変遷については、ジュディス・パトラー『欲望の主体——ヘーゲルと20世紀フランスにおけるポスト・ヘーゲル主義』大河内泰樹ほか訳、堀之内出版、2019年、また、仲正昌樹『ヘーゲルを越えるヘーゲル』講談社、2018年。
- 13) 特に政治学への影響に関しては、アルフォンス・ゼルナーによる研究が先駆的であ

る。たとえば, Alfons Söllner, “From Public Law to Political Science? The Emigration of German Scholars after 1933 and Their Influence on the Transformation of a Discipline,” in *Forced Migration and Scientific Change: Emigré German-Speaking Scientists and Scholars after 1933*, eds. Mitchell G. Ash and Alfons Söllner, German Historical Institute/Cambridge University Press, 1996, pp. 246–272. また, アメリカにおける知の発展が(西)ドイツへ還流していく動きまで辿った, より最近の優れた歴史学的研究として, Udi Greenberg, *The Weimar Century: German Émigrés and the Ideological Foundations of the Cold War*, Princeton University Press, 2014. 特に国際関係論への影響に照準した論文集としては, Felix Rösch ed., *Émigré Scholars and the Genesis of International Relations: A European Discipline in America?* Palgrave Macmillan, 2014.

- 14) 彼らはコジェーヴともつながりがあった。アーレントがハイデルベルクで師事したのはコジェーヴと同じくカール・ヤスパースだったとして, シュトラウスに至っては自身がコジェーヴの親しい友人であった。
- 15) John G. Gunnell, *Political Theory: Tradition and Interpretation*, Winthrop, 1979. また, Terence Ball, “Discordant Voices: American Histories of Political Thought,” in *The History of Political Thought in National Context*, eds. Dario Castiglione and Iain Hampsher-Monk, Cambridge University Press, 2001, pp. 113 ff.
- 16) Peter Laslett, “Introduction,” in *Philosophy, Politics and Society* (1st Ser.), ed. Laslett, Basil Blackwell, 1956, pp. vii, ix.
- 17) ただし, 文脈主義者たちがラズレットの立場をどう捉えたかは, 近年, 論争的な問題となっている。彼がシュトラウス学派, 実証主義者, (本稿でも後に触れる)「イデオロギーの終焉」派のいずれとも異なる道をとったところにこそ文脈主義が現れたとする解釈として, Petri Koikkalainen, “Peter Laslett and the Contested Concept of Political Philosophy,” *History of Political Thought* 30-2, 2009, pp. 336–359. むしろラズレットからの離脱こそが文脈主義を生みだしたと説く解釈として, 古田拓也「ラズレットなしで失われた世界へ——初期クエンティン・スキナーの方法論」政治思想学会 2020 年度大会 (著者の許可をえて引用)。なお, ラズレットの知的変遷については, John Dunn and Tony Wrigley, “Thomas Peter Ruffel Laslett, 1915–2001,” *Proceedings of the British Academy* 130, 2005, pp. 109–129. この文献については古田拓也氏からご教示いただいた。
- 18) Alfred Cobban, “The Decline of Political Theory,” *Political Science Quarterly* 68-3, 1953, p. 324.
- 19) 当時のアメリカにおいて, サルトルやニーチェの実存主義的な思想が人気を博すようになっていた事実からも, 〈政治哲学の死〉を受け入れる風土が同地にあったことはうかがいえる。ブルース・ククリック『アメリカ哲学史——1720 年から 2000

年まで』大厩諒ほか訳，勁草書房，2020年，341頁以下。

- 20) Laslett, “Introduction,” p. ix.
- 21) 彼女はハーバード大学でカール・フリードリヒに師事したが，当時のアメリカ政治学界に大きな影響力を持った彼もまた，亡命者ではなかったにしても移民であった。ただし，二人が知的にどの程度近い位置にいたと言えるかは，論争的な問題である。Andreas Hess, *The Political Theory of Judith N. Shklar: Exile from Exile*, Palgrave Macmillan, 2014, esp. ch. 2.
- 22) J・N・シュクラール『ユートピア以後——政治思想の没落』奈良和重訳，紀伊国屋書店，1967年（原書は1957年），v頁。
- 23) シュクラール『ユートピア以後』1頁。
- 24) シュクラール『ユートピア以後』vii頁。
- 25) Sheldon S. Wolin, “Review of *After Utopia: The Decline of Political Faith* by Judith N. Shklar,” *American Journal of Jurisprudence* 5-1, 1960, p. 165.
- 26) 近代啓蒙の特徴を単純な理性崇拜の精神と結びつけて捉える理解は，今日ではほとんど否定されていると言える。実際，啓蒙の思想家たちが取り組んでいたのは，理性に何が可能で何が可能ではないのかという限界を画する思索であったようにも見える。しかし，まさにそうした歴史言説を仮構してでも大きな物語を語ることこそが，〈政治哲学の死〉に抗した人々の為そうとしたことであったのかもしれない。あらゆる事象が実証を通じて解明されるべき事柄へと解消されてしまったとき，物事のあり方はただ時代によって異なるとする相対主義が広がる。ただ，たとえばシュトラウスに言わせると，そうして相対主義的であるはずの歴史主義も，しかしあらゆる事象は歴史的に個別であるという自らの主張だけは普遍的なものとするなかで，（全体主義と結びつきうる）独断的性格を帯びるだろう（西永亮「歴史主義と「哲学的倫理」としての自然的正」石崎嘉彦／厚見恵一郎（編）『レオ・シュトラウスの政治哲学——『自然権と歴史』を読み解く』ミネルヴァ書房，2019年，特に33頁以下を参照）。本稿で近代，啓蒙，自由主義，理性への信頼，自律した個のイメージといったものを留保なく結びつけているのも，このような理解に立つてのことである。ウォーリンがシュクラールと同列に並べるモーゲンソーらについてもよく似た反歴史主義の意識が認められることは，以下本稿でも，脚注を通じて補足していくこととなる。差しあたって，Joel H. Rosenthal, *Righteous Realists: Political Realism, Responsible Power, and American Culture in the Nuclear Age*, Louisiana State University Press, 1991, pp. 9–10.
- 27) Wolin, “Review of *After Utopia*,” p. 164 fn. 3.
- 28) より後の部分だと，現実主義というのは自由主義の伝統を曲解して「^{フニティッシュ}狂信」の対象に仕立てあげた「^{ニュー・コンサーヴァティズム}新しい保守主義」の最近の流行」だ，といった言葉も見られる。Wolin, “Review of *After Utopia*,” p. 169.

- 29) Cobban, “Decline of Political Theory,” p. 326. 対するモーゲンソーの方も、1955年の作品において、「政治理論の没落」を「重要な論文」だと述べていた。Hans J. Morgenthau, “The Commitments of Political Science (1955),” in *Dilemmas of Politics*, The University of Chicago Press, 1958, p. 39. こうした相互言及関係については、さらに傍証を挙げていくこともできる。たとえば、コバンが挙げた面々には、一般に国際関係論で触れられることのない政治理論家のベルトラン・ド・ジュヴネルもいた。上記1955年の論稿を収めたモーゲンソーの論文集には、このジュヴネルに関する論評もカーへの批評と並べて取められている (Morgenthau, *Dilemmas of Politics*, chs. 21–22)。カーに対するマンハイムの影響は今日だとよく知られるに至っているが (Charles Jones, *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press, 1998)、先のラズレットは、そのマンハイムが発した「政治の科学は可能か」という問いに導かれて思索した人でもあった (古田「ラズレットなしで失われた世界へ」)。さらにマンハイムの淵源にヴェーバーを見れば、ここにもモーゲンソーとのつながりを見ることはできるかもしれない (cf. Peter Beiner, “Translating Max Weber: Exile Attempts to Forge a New Political Science,” in *Émigré Scholars and the Genesis of International Relations*)。マンハイムの議論などは当時の社会学者たちがほとんど共通に知るところであって、彼への言及だけをもってある論客と別の論客の知的な近さを示すことはできまい。ただ、そうして政治は科学足りうるのかという問いが一種の常識となる程度に、〈政治哲学の死〉という問題設定もまた、当時の政治学者たちによって共有されたものであった。
- 30) ラインホルド・ニーバー『人間の運命——キリスト教的歴史解釈』高橋義文/柳田洋夫訳、聖学院大学出版会、2017年 (原書は1943年)、17頁、204–205頁。
- 31) Nicolas Guilhot, *After the Enlightenment: Political Realism and International Relations in the Mid-Twentieth Century*, Cambridge University Press, 2017, esp. ch. 2. また、Ian Hall, “The Triumph of Anti-Liberalism? Reconciling Radicalism to Realism in International Relations Theory,” *Political Studies Review* 9-1, 2011, pp. 42–52.
- 32) ギロが提示している論点をさらに一つ付け加えておくと、現実主義者たちは、こうした立論を展開するなかで、戦前有力だった法実証主義者ハンス・ケルゼンに戦いを挑んでもいた。存在と当為を峻別して法学の領域を画定しようとするその思想の基盤には、コジューヴらの世代が退けていった新カント派の哲学があった。ただ、このケルゼンとの関係がどこまで対立的なものであったかをめぐっては、以下でも法万能主義と形式主義をめぐって間接的に触れているように、今日様々に解釈が展開されている。ここでは、現実主義者たちも形式主義者だとする以下のシュクラーの見解が、彼らのケルゼンへの近さを重視した見方であることだけを予め指摘しておくこととしたい。
- 33) J・N・シュクラー『リーガリズム——法と道徳・政治』田中成明訳、岩波書店、

1981年, 13頁。

- 34) 先に触れたケルゼンへの批判も、同じ論理の下で為された。存在と当為の峻別
は、現実政治において見かけ上のものにとまらざるをえず、現状を愛好するイデオロギーを科学的客観性の名の下に覆い隠すのであった。William E. Scheuerman, “Realism and the Kantian Tradition: A Revisionist Account,” *International Relations* 26-4, 2012, esp. pp. 460 ff.
- 35) ハンス・J・モーゲンソー『科学的人間と権力政治』星野昭吉/高木有訳, 作品社, 2018年(原書は1946年), H・モーゲンソー『人間にとって科学とは何か』講談社, 1975年(原書は1972年)。
- 36) シュクラール『リーガリズム』187頁, 191頁。あらゆる形式主義に反発したシュクラールが、シュミット流の決断主義とも対決していた点については, Katrina Forrester, “Judith Shklar, Bernard Williams and Political Realism,” *European Journal of Political Theory* 11-3, 2012, esp. p. 249. ここで彼女は、啓蒙近代的な伝統を単純に否定し去るのではなく、法の支配にしてもそれ自体を退けるというよりはそこから中立性の幻想を取り去るという形で、いわば第三の道を探っていくだろう。しかし、現実主義者たちの道も、それと必ずしも異なるものではなかったのかもしれない。モーゲンソーらが紛争を美化し諸情勢の必然性を説いたとの理解に抗して、昨今の研究は、古典的現実主義者たちが倫理的な構想を持ちつつ現状の漸進的変革を探っていた様子に光をあてている。たとえば, William E. Scheuerman, *The Realist Case for Global Reform*, Polity, 2011. あるいは、現実主義者たちの意図がそういうものであったとして、しかしそうした意図が彼らの論理構成ゆえに裏切られるというところまでシュクラールは批判していたのだろうか。現実主義思想の決断主義的な前提に気づいていたシュクラールだからこそ、その点を閑却してきた従来の国際関係学史において触れられてこなかったのかもしれない。以下で見るとおり、ウォルツが国際関係論の正統へと押し上げられていったことの意味がまさに決断主義的な論理を排することにあっただとすれば、この解釈には妥当性があるように思われる。
- 37) 政治思想史の方法をめぐっては、古典のなかに普遍的な問題を探る(そのため行間を拾って秘教的な読みを行う)シュトラウス学派と、テキストが書かれた時代の意味秩序を重視する文脈主義とを対置する図式が、この半世紀ほどのあいだ慣例的にとられてきた。この枠組みの妥当性を受け入れてそれに照らすとすれば、理論的営為に重きを置く論文集の趣旨を以下の言葉遣いで説明していたモーゲンソーは、前者に近い立場の存在だったと言えるだろう。「政治思想史は、伝統の教えと今日の世界の要求との対話である。創造的な政治思想は、その時代の——そしてあらゆる時代の——政治的経験を、普遍的な諸力・問題・やりとりの型をそのなかに見いだすことで照らしたすのであって、政治的な生とはそういったものから成るのである」。Morgenthau, *Dilemmas of Politics*, p. 1, 強調は引用者。実にプラトンの『テア

イテトス』を引き合いに始まる巻頭論文以下、同書を貫く主題とは、思想の普遍性と時代性との（書名にある）ジレンマであって、いかにして真に普遍的なものは可能か、そういったものがそもそもありうるのかという、〈政治哲学の死〉に直結する問題である。既にウォーリンのシュクラール評に関連して触れたとおり、仮に普遍的なものが歴史に見いだせないとすれば客観的なものの存在を認めることは能わず、世界は価値相対主義に包み込まれてしまう。だからこそ、モーゲンソーにおいては、政治理論と政治学の合致が説かれることとなる。あるいは、だからこそ、多数派であることを理由としたところで民衆による臆見の支配が許されることはなく、一部の統治階層が独占する真理に基づいた統治が——プラトンの哲人王をも彷彿させるかのように——提唱されるのである。（古典派の彼——古代に打ちたてられた古典およびその遺産と対峙した諸テクストを読む人——が行っていた、思想と歴史に依拠して同時代の政治を論じるという所作は、〈政治哲学の死〉を克服しようとする実践的営為に他ならなかった。

38) 実際、20世紀半ばという時代にあつては、国際的なものが優れて哲学的かつ政治的な思索の対象とならざるをえなかったように思われる。1959年のホフマンは、当時の世を「「全体的な」国際関係もしくは「国際的内戦」の世界」と呼んだ上で、「平和と世界秩序の諸問題が、他のすべての問題を支配している」と述べていた。スタンレー・ホフマン「国際関係論——理論への長い道のり（1959年）」『スタンレー・ホフマン国際政治論集』中本義彦編訳、勁草書房、2011年、60頁。フランスにおいてこうした問題意識を持っていた人物の最たる例は、ホフマンにも影響を与えたレイモン・アロンだろう。現象学の紹介から知識人としての経歴を開始した彼は、本稿が物語の始点に据えたコジェーヴの友人でもあった。そのコジェーヴ自身、自らが理想とするヨーロッパ像を築きあげていくなかでは、植民地主義との絡みからその対外的な関係を考察し、さらにはそのヨーロッパを現実存在せしめるべく高級官僚として国際経済の実務にも携わったのであった。オフレ『評伝 アレクサンドル・コジェーヴ』第6章。

39) ハーツはシュクラールの教師にして後の同僚であった。シュクラールとハーツが具体的な人間関係において近い位置にいたからといって、両者の思想までが共鳴しあうものだったわけではない。ただ、政治思想が岐路に立っており、その進むべき方向をアメリカの内から考える必要があるという点は、二人とも共通して認識していたように思われる。両者の異同については、Hess, *The Political Theory of Judith N. Shklar*, esp. ch. 4. なお、彼女の周辺には現実主義的な国際政治学者たちも少なからずいた。たとえば、彼女が大学院生だった頃のハーバードには、ヘンリー・キッシンジャーや（やはりフリードリヒに師事した）ズビグネフ・ブレジンスキーがいた。こうした人的な関係性それ自体がただちに思想的なつながりまで指し示すことはやはりないとしても、国際関係論がシュクラールへ目を向けてこなかったことの妥当性を

疑わせる程度には示唆的な事実だろう。

- 40) ルイス・ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』有賀貞訳、講談社、1994年、20–21頁。
- 41) 1950年代アメリカの政治学において、ソ連を全体主義国と見る合意が研究者たちのあいだにできあがっていた点については、イド・オレン『アメリカ政治学と国際関係——論敵たちとの対応の軌跡』中谷義和訳、御茶の水書房、2010年、第3章。
- 42) ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』29頁。
- 43) ハーツ『アメリカ自由主義の伝統』32–33頁。
- 44) Hans J. Morgenthau, “Arguing about the Cold War (1967),” in *Truth and Power: Essays of a Decade, 1960–70*, Prager, 1970, p. 354.
- 45) Hans J. Morgenthau, *The Purpose of American Politics*, Alfred A. Knopf, 1960, p. 5.
- 46) 特に亡命者のアメリカ観という視座から彼女の『革命について』（1963年）を論じたものとして、前川玲子『亡命知識人たちのアメリカ』世界思想社、2014年、第8章。
- 47) こうした思想の変遷を、亡命者がアメリカに自らを馴染ませていく過程として追ったものとして、Hess, *The Political Theory of Judith N. Shklar*.
- 48) ラインホルド・ニーバー『アメリカ史のアイロニー』大木英夫/深井智朗訳、聖学院大学出版、2002年、75頁。
- 49) Guilhot, *After the Enlightenment*, esp. pp. 107 ff.
- 50) Morgenthau, *The Purpose of American Politics*, pp. 11, 13, 16, 30, 231. アーレントの議論に通じている読者なら、こうしたモーゲンソーのアメリカ史像が、彼女のそれともいくらか親和性がある点に思い至るかもしれない。この両者の歴史像は、前後して現れたジョン・ボーコックの研究以来今日まで議論が活発な共和主義パラダイムとも、一脈通ずるものがあるように見える。1950年代には、ロックフェラー財団の支援を受けたフェリックス・ギルバートが、共和主義者マキアヴェッリを復活させようとしていた。モーゲンソーら同時代の論客が現実主義の伝統に組み入れたマキアヴェッリも、このマキアヴェッリだった。Guilhot, *After the Enlightenment*, ch. 3. ただし、これらの連続性については、強調しすぎるべきでないとの見解もある。アメリカ独立革命の理解をめぐるアーレントとモーゲンソーにあった異同については、宮下豊『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』大学教育出版、2012年、238頁以下。モーゲンソーが自らの思想をアメリカに順化させていった過程に関して、より個別的な論点をめぐっては、Cornelia Navari ed., *Hans J. Morgenthau and the American Experience*, Palgrave Macmillan, 2018.
- 51) 人々の自由は擁護されるべきで、ゆえに政治参加への自由も擁護されるべきである。しかし、一般意志説の理念で民衆の同意を強調するルソー的な民主主義は過剰であり、大勢順応の危険——ハーツも懸念していたように、元来多元的なアメリカがにも拘わらず一つの共同体として存立していく上で常に抱えてきた危険——を招

き入れるがために抑えられなければならない。それが、この論理のとる具体的な形であった。そこから至り着くのが、前注でも触れた共和主義への接近であって、それこそがむしろ民主主義を再生させる道となる。Morgenthau, *The Purpose of American Politics*, esp. pp. 243 ff. なお、こうして言わば西側に立って発言を行い、また公共の徳を重視した古典的現実主義者たちにしても、グローバルな十字軍に身を投じよと述べたのではなかった。彼らはむしろ、多くの場合において、社会がそうした極端へ進もうとすることを牽制した。個々の国民国家が自らを道徳的に至高であることを謳い、争いが殲滅的なものとなりがちであるからこそ、権力のあり方を観察して抑止を試みる必要があるのであった。これこそが、慎慮や非完成主義といった言葉で捉えられ、実践的にはベトナム戦争批判で知られてきた、彼らの思想を基礎づける道徳論的要素である。Rosenthal, *Righteous Realists*; Greenberg, *The Weimar Century*, ch. 5; Vibeke Schou Tjalve, *Realist Strategies of Republican Peace: Niebuhr, Morgenthau, and the Politics of Patriotic Dissent*, Palgrave Macmillan, 2008; Scheuerman, *The Realist Case for Global Reform*; 宮下『ハンス・J・モーゲンソーの国際政治思想』141頁以下。ただ、絶えず判断を重ねよというその主張の裏で、彼らが実際に最終的解決への誘惑に抗し続けられたかは、評価が難しい。核戦争の危機を受けてアメリカ社会に蔓延した黙示録的な観念を背景として、当初は歴史が繰り返すという円環的な時間概念に基づき、過去に学んで慎慮を重ねよとの悲劇的政治観をとっていたモーゲンソーが、——そうした通俗的な黙示録に置き換えるためではあったが——次第にある種の救済を展望する終末論へ移行していったとする解釈として、Alison McQueen, *Political Realism in Apocalyptic Times*, Cambridge University Press, 2018, ch. 5. また、ソ連の核保有によって限定戦争の理念が崩れて以降、ニューバーとモーゲンソーの論調に見られた揺れについては、Campbell Craig, *Glimmer of a New Leviathan: Total War in the Realism of Niebuhr, Morgenthau, and Waltz*, Columbia University Press, 2003. ただ、後者の解釈では、核時代に入り米ソ直接衝突の可能性を否定するようになったことをもって、彼らが現実主義の理念を捨てたとする。しかし、言い換えればそれは、ソ連を殲滅すべき悪と単純化する所作を避け続けた点で彼らが一貫していたということである。そうして完成主義を拒む姿勢にこそ、彼らの思想の核心を見るべきではないか。ただし、目下重要なのは、こうして彼らの一貫性がしばしば論争的な問題となることそれ自体である。普遍性なるものが疑わしいものとなった時代になお普遍的なものを求めた彼らの苦難が、こうした解釈の対立に現れているように思われる。世論やレトリック（臆見）が社会にもたらす影響をめぐって彼らがどう考えていたのか。彼らは真に普遍的なものを求めたのか道具的にそうした仮構を人々に信じ込ませようとしていただけなのか。こういった議論も同じ問題に淵源するのだろうか。（市民宗教の重要性を説く）マキアヴェッリやルソーとの系譜上の連続性なども、そこから見いだされてきた面は

あるのかもしれない。

なお、核の問題と関連して、水素爆弾の登場が20世紀半ばの国際政治論に与えた影響をめぐる、現実主義的な思惟を焦点に据えながら論じた研究としては、Rens van Munster and Casper Sylvest, *Nuclear Realism: Global Political Thought during the Thermonuclear Revolution*, Routledge, 2016. 同書でとりあげられているのは、ジョン・ハーツの他は、(アーレントの夫だった)ギュンター・アンダース、ルイス・マンフォード、バートランド・ラッセルと、国際政治学であまり触れられてこなかった人々だが、一般にモーゲンソーらのものとされてきた現実主義という思想が彼らの視座を言い表す上で採用されている理由の一つも、近代が行き着く先についての関心を彼らが共有していた点に求められている。

- 52) 実際のところ、ウォルツとモーゲンソーらとは世代の上で断絶していたわけでもない。戦後アメリカで古典的現実主義者たちがまとまった理論家集団を成しえたのには、ロックフェラー財団の支援も与っていた。その財団の一大プロジェクトとして行われた国際関係論のあり方をめぐる1954年の集会には、ウォルツも参加していた。Nicolas Guilhot ed., *The Invention of International Relations Theory: Realism, the Rockefeller Foundation, and the 1954 Conference on Theory*, Columbia University Press, 2011.
- 53) Guilhot, *After the Enlightenment*, ch. 6. ウォルツの理論を自由主義の政治理論として読みなおす動きは、研究者のあいだで進みつつある。冷戦ゆえにアメリカが自由主義イデオロギーの媒体になったという、本稿と同様の視角を文脈に据えているものとして、Michael Foley, “Bringing Realism to American Liberalism: Waltz and the Process of Cold War Adjustment,” in *Realism and World Politics*, ed. Ken Booth, Routledge, 2011. 同論文が説くところによれば、自律した個のイメージとそれに付随する利害の合理的調停可能性および進歩への信頼に対し、国際社会においてはより御しがたい力があるとして構造の拘束に警鐘を鳴らしたのが、ウォルツなのだということ。と同時に、そうして打ちたてられた彼の理論には、構造の論理に馴染むところにこそ国家の自律的な行動の余地を見る、ある種楽観的な展望も含み込まれているという。ここで専ら俎上に載せられているのは『人間・国家・戦争』である。ただ、理論の構造決定論的な性質を強めた『国際政治の理論』において、この楽観的側面は高められているように思われる。というのも、そこに提示されている世界とは、構造以外の要素が極限まで削ぎとられるがゆえに、その論理に上手く乗りさえすれば物事は適切に処理できるという、一種の技術ユートピアだからである。実に彼は、科学技術の粹たる核の拡散によってこそ国際社会の秩序はより安定しうる、とすら説いたのであった(スコット・セーガン/ケネス・ウォルツ『核兵器の拡散——終わりなき論争』川上高司/斎藤剛訳、勁草書房、2017年)。構造の影響を強調することには民主主義の対外政策決定能力に対する疑いを争点から外す含意

があったのであり、ウォルツの理論はモーゲンソーらの近代合理主義批判を削ぎ落とす意図に立っていたとする解釈として、Michael C. Williams, “The Politics of Theory: Waltz, Realism, and Democracy,” in *Realism and World Politics*, ed. Ken Booth, Routledge, 2011. また、近代的個人像を前提にした『人間・国家・戦争』から構造に焦点を置く『国際政治の理論』への移行に、同様の意味を認めている先例としては、Richard K. Ashley, “Living on Border Lines: Man, Poststructuralism, and War,” in *International/Intertextual Relations: Postmodern Readings of World Politics*, eds. James Der Derian and Michael J. Shapiro, Lexington Books, 1989, pp.259–321. ただ、後者の議論について言えば、ウォルツのこうした側面はやはり『人間・国家・戦争』で現れていたと見るべきだろう。この点、モーゲンソーにとっては退けられるべきジャコバン派の教祖だったルソーが、ウォルツにおいては自らの理論に正統性を付与する偉人だったという対照が示唆的である。実のところ、ウォルツの構造論のひらめきは、ほとんどすべてルソーからきているようにすら見える。ウォルツによれば、「人間の行動、人間の本性」を「大部分、人間が生きている社会の産物」とした上で、その同じ世界像から、「戦争の主要原因を人間や国家ではなく、国家システムそのものにあると見ている」のがルソーだった。そのルソーは、この同じ論理ゆえに、人間とはどういう存在なのかと問うところからあるべき社会を構想する型の思索を戒めた思想家でもあったわけだが、とりわけウォルツにとって都合がよかったと思われるのは、ルソーの論理に従った場合、人間を強いて非合理的とも言う必要がないことであった。よく知られた鹿狩りの例を参照した部分で、ウォルツは次のように言う。「ルソーは、ウサギを捕まえようとする狩人の行動を善とも悪とも呼ばない点では、スピノザと同じであるが、スピノザとは異なり、それを合理的とも非合理的とも呼ぼうとしない。ルソーは、問題がアクターのみにあるのではなく、彼らが直面している状況にもあることに気づいたのである」。構造の影響力が決定的なものであるがために、人民個々人が啓蒙近代的な理性の持ち主である可能性は、強いて唱道はされないうえに否定されることもまたないのである。ケネス・ウォルツ『人間・国家・戦争——国際政治の三つのイメージ』渡邊昭夫/岡垣知子訳、勁草書房、2013年、16頁、18頁、158頁。実にウォルツは、『国際政治の理論』でもまた——他の研究者のルソー解釈を批判するという政治思想史家然とした作法で——この点を強調することとなるだろう。「ルソーがほかの政治思想家たちのなかでも際立っているのは、参加者の属性や行動の観察だけから結果を推論するのが不可能だと強調した点においてである。人の場合でも国家の場合でも、行動の文脈がつねに考慮されなければならない。文脈そのものが結果を変えると同時に、主体の属性や目的や行動に影響を与えるからである。しかし、ホフマンは、ルソーの「戦争と平和の問題の解決」は、「世界中に理想的な国家をつくること、そうすればカントが述べたような世界連盟の必要もなく、平和が訪れる」……という内容だと考え

ている。興味深いことに、ルソーはそうした考えを拒絶し、ほとんど嘲笑しているほどである」。ケネス・ウォルツ『国際政治の理論』河野勝/岡垣知子訳、勁草書房、2010年、61頁。そうして構造の影響を強調する論理において、逆説的にも繰り返し指摘されるのは、(階層的秩序の下にあるのとは異なる) アナーキーな国際社会が、^{セルフ・ヘルプ} 自助——自律した自由主義の主体の行動様式を端的に表現する語——のシステムだということなのである。ウォルツ『国際政治の理論』特に146頁以下。

- 54) 社会史的背景も含めたプラグマティズムの台頭過程については、ククリック『アメリカ哲学史』第2部。同書著者の言葉を借りれば、第二次世界大戦前、「政治における不合理な側面は制御できるかもしれないという独特な希望」があった時代において、ジョン・デューイの倫理学説が置いていたのは、「人は一皮むけば同じであり、いったん科学の道具的な有用性が知的混乱を取り除くならば、彼らの態度は制御されるようになるだろう」という前提であった。ククリック『アメリカ哲学史』286頁、274頁。
- 55) 「失われた世代」がハイ・カルチャーを牽引し、また人種や性差が文化的な争点として重要性を増していった当時の歴史的状况については、たとえば、Jennifer Ratner-Rosenhagen, *The Ideas That Made America: A Brief History*, Oxford University Press, 2019, ch. 6.
- 56) 思想界の正統と言える位置にいたデューイとの関係において、現実主義者ニーバーはまさしく挑戦者であった。両者の思想的対立については、井上弘貴『ジョン・デューイとアメリカの責任』木鐸社、2008年。また、大衆社会のあり方をめぐってデューイの論敵であったウォルター・リップマンも、やはりロックフェラー財団を介して古典的現実主義者たちとつながりを有した。Guilhot, *The Invention of International Relations Theory*. リップマンを現実主義者たちと並べて論じている先駆的な研究としては、Rosenthal, *Righteous Realists*.
- 57) ただし、個々の文脈における具体的状況に即した判断を重視するという点で、現実主義とプラグマティズムとは相通する面があるだろう。あるいは逆に、シュクラールの批判にもあったように、形式主義的という面においてこそ現実主義がプラグマティズムや実証主義と重なる面もあろう。こうした点をつぶさに検討するならば、ここで図式的に描いている両思维様式の差異は、それぞれのうちのある型のもののあいだでは歴史上現に対立が見られてきたにしても、原理的な面において決定的なものではおそくない。現実主義とプラグマティズムの近さについては、Matthew Festenstein, “Pragmatism, Realism and Moralism,” *Political Studies Review* 14-1, 2016, pp. 39–49. また、Seán P. Molloy, “Pragmatism, Realism and the Ethics of Crisis and Transformation in International Relations,” *International Theory* 6-3, 2014, pp. 454–489.
- 58) ダニエル・ベル『イデオロギーの終焉——1950年代における政治思想の涸渇につ

いて』岡田直之訳，東京創元新社，1969年（原書は1960年），251頁，266頁，264頁。

- 59) 実際のところ，当時のアメリカ政治学全体が，〈政治哲学の死〉と向き合っていたように思われる。（科学派）と結びつけられる行動論の論客たちにしても，その点是不変変わらない。コバンの論文のさらに2年前，前後して行動論の立役者となっていくデイヴィッド・イーストンもまた，「近代政治理論の没落」と題された論文を記していた。David Easton, "The Decline of Modern Political Theory," *Journal of Politics* 13-1, 1951, pp.36-58. 過去の思想家による規範的主張が歴史主義の波に押されて普遍性を否定されていくのに際し，ラズレットがそれを過去の時々の社会（的意味）構造の産物と見たとすれば，イーストンの方はそれを各思想家の個人的な時代経験の産物だとするだろう。イーストン自身はそこから価値の理論と事実の理論との接合を図ろうとしたものの，実際には両者の区分けを進めるという形で行動論が展開されていく。ただ，結果がどうであろうと出発点がこのようなものだったことに鑑みれば，この運動もまた，〈政治哲学の死〉に対する一つの応答だったのだと見るべきである。ロバート・ダール，チャールズ・リンドブロム，ハロルド・ラスウェルらの議論をアレントのそれと並べ，彼らの思考がいずれも啓蒙の別な可能性を模索していたとする解釈として，Ira Katznelson, *Desolation and Enlightenment: Political Knowledge after Total War, Totalitarianism, and the Holocaust*, Columbia University Press, 2003.
- 60) 事実，『国際政治の理論』は行動論的な帰納主義を批判するところから始まる。そこにおいて彼は——示唆的にも，一方でレヴィ=ストロースの構造主義を，他方でパースのプラグマティズムを引きながら——，データの集積が普遍には至らないことを説くのである。ウォルツ『国際政治の理論』特に4頁以下。
- 61) ウォルツとロールズの近さを指摘したのは本稿著者が最初ではない。Richard Devetak, "Waltz, the States of International Relations, and Theoretical Abstraction: Contextualizing a Legacy," *Australian Journal of Political Science*, 49-3, 2014, pp.552-557. しかし，研究ノートにとどまる同論文は，二人がともに経験的な次元ではなく抽象的な次元で理論を組み立てようとしたことを指摘しているだけで，主張の内容ないし価値前提の面で両者にどのような近縁性があったのかについては，具体的な考察を欠いている。
- 62) Robert Adcock and Mark Bevir, "The Remaking of Political Theory," in *Modern Political Science: Anglo-American Exchanges since 1880*, eds. Adcock, Bevir, and S. C. Stimson, Princeton University Press, 2007, p. 216.
- 63) Brian Barry, "The Strange Death of Political Philosophy," *Government and Opposition* 15-3/4, 1980, pp. 284-285.
- 64) マイケル・J・サンデル『リベラリズムと正義の限界』菊池理夫訳，勁草書房，2009

年、チャールズ・テイラー『自我の源泉——近代的アイデンティティの形成』下川潔/桜井徹/田中智彦訳、名古屋大学出版会、2010年。

- 65) ジョン・グレイ『自由主義の二つの顔——価値多元主義と共生の政治哲学』松野弘監訳、ミネルヴァ書房、2006年、33頁。また、トニー・ジャット『20世紀を考へる』河野真太郎訳、みすず書房、2015年、433–434頁。
- 66) ロールズの思想が1950年代から連続したものであることを強調するカトリーナ・フォーレスターは、近代社会をゲームのアナロジーで見る視点がその根底にあることを指摘している。近代自由主義経済学の発想に従うのなら、人間社会の秩序は、市場への自由な参加を通じて自生的に現れる。これと同様の視点から社会を捉えたがために、ロールズもまた、政治には最低限のルールを形成し維持する役割しか求めない。ただ、ゲームでは運勢に左右されて勝者が勝ちを重ねた結果、敗者が参加意欲を失う事態も起こりうる。そこからゲームそれ自体が崩壊してしまうといったことは、避けなければならない。したがって、各人の責めに帰しえない不平等は是正すべきである。これが彼の格差原理の原点だというわけである。Katrina Forrester, *In the Shadow of Justice: Postwar Liberalism and the Remaking of Political Philosophy*, Princeton University Press, 2019, esp. pp.12–13. 出版もない時期の『正義論』は実に、「イデオロギーの終焉」論者が持っていたのと同じイデオロギーにすぎないとも批判されたのであった。Forrester, *In the Shadow of Justice*, pp.118–119. 非合理的な人間の集まりに秩序をもたらすにあたって強権的な統治者の働きが欠かせないという現実主義者たちの視座は、ここでは当然に退けられている。
- 67) 国際関係論で最もよく批判されてきたこの点においてこそ、ウォルツもまた〈政治哲学の死〉と向き合っていた様子はよく現れている。彼のルソー解釈については既に触れたが、〈科学派〉と呼ばれる彼も、実際のところ、ほとんど常に過去の思想家を引照しながら議論を進めた。その彼が見たところ、古典的な著作というのは、時代を経ても変わることのない知見を提供しているという意味においてこそ古典なのであった。「R. G. コリングウッドはかつて、哲学者の著作を理解する最良の方法は、彼らが答えようとしている問いを探し出すことだと述べた。ここでは、国際政治理論の問題を探求する最良の方法は、中心的な問いを提示し、それへの答えを言い当てることだと提案したい」。ウォルツ『人間・国家・戦争』22頁。ウォルツの理論は、彼が理解した形での過去の思想が持つ普遍性を、改めて再生させようとするものであった。ある種の技術ユートピアを展望した人物だったにしても、彼を〈古典派〉と区別して〈科学派〉と括ることは、この点でも問題がある。モーゲンソーもウォルツも何かしらの普遍的な視座を求めており、その限りで両者とも歴史を超えようとしていたとして、二人のあいだで異なっていたのはその超え方であった。先述のとおり、ウォルツとモーゲンソーとは別々の時代に知的生活を営んでいたわけでもなかった。研究者の世代交代というものがある種の師弟関係を軸に具体的な

人的関係を経つつ進んでいくものだとすれば、こうした断絶性と連続性の並存は半ば当然である。日本の政治学に関しては、実証政治学の礎を築いた『リヴァイアサン』第一世代が先立つ丸山眞男らに見られた思想史的な素養を持ち合わせていたことも指摘されている。同様のことはアメリカの文脈でも言いうるだろう。今触れた日本の政治学をめぐる事情については、渡部純『現代日本政治研究と丸山眞男——制度化する政治学の未来のために』勁草書房、2010年。

- 68) 各批判について、たとえば、Gideon Rose, “Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,” *World Politics* 51-1, 1998, pp. 144–172; Yosef Lapid and Friedrich V. Kratochwil eds., *The Return of Culture and Identity in IR Theory*, Lynne Rienner, 1996.
- 69) フランソワ・キュセ『フレンチ・セオリー——アメリカにおけるフランス現代思想』桑田光平/鈴木哲平/畠山達/本田貴久訳、NTT出版、2010年、12頁。
- 70) Forrester, *In the Shadow of Justice*, p. 103. アメリカの歴史の変遷を描くサンデルも、善き社会をめぐる論争の問題を括弧に入れて配分の公正のみを公的な議題とするようになっていった言説状況の転機を、1960年代に見ている。マイケル・サンデル『公共哲学——政治における道徳を考える』鬼澤忍訳、筑摩書房、2011年、第1章。
- 71) 同じ時期、ロバート・コヘイン流の制度論が現れ、自由主義世界は相互に結びつきあうことでなお一体であると見たのも、近い思想傾向を持つ動きと捉えることができる。ロバート・コヘイン『覇権後の国際政治経済学』石黒馨/小林誠訳、晃洋書房、1998年(原書は1984年)。現に、そこで生まれてくる国際政治経済の潮流は、『国際政治経済学評論 (Review of International Political Economy)』などでその文化的偏狭さが批判的とされていくのであり、そこからグローバル政治経済学を掲げた議論が導かれることともなる。コヘインの理論が国際社会の構造に対する認識をウォルツの理論と共有するものであることは、ネオ-ネオ総合の標語を通じて広く確認されていく。David A. Baldwin ed., *Neorealism and Neoliberalism: The Contemporary Debate*, Columbia University Press, 1993.
- 72) アレクシス・ド・トクヴィル『アメリカのデモクラシー 第2巻(上)』松本礼二訳、岩波書店、2008年、39頁以下。
- 73) 先立つ1920年代にはチャールズ・メリアムらによって先駆的な試みが始まったこと、1950年代の動きには政治学の自由主義的な価値前提を再定式化する目的が含まれていたことから、行動論がイデオロギーとしては保守的な含意を伴っていた点を強調した議論として、ガネル『アメリカ政治理論の系譜』213–214頁。
- 74) Martin Jay, *The Virtues of Mendacity: On Lying in Politics*, University of Virginia Press, 2010, pp. 6ff. また、Tjalve, *Realist Strategies of Republican Peace*, p. 2.
- 75) スタンレー・ホフマン「アメリカン・ソーシャル・サイエンス——国際関係論(1977

- 年)』『スタンレー・ホフマン国際政治論集』119頁。
- 76) ホフマン「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」101頁, 102頁, 102頁。
- 77) ホフマンは、ナチスによる迫害を経験したユダヤ人にして戦後アメリカへと移ってきたフランス国民であった。知的サークルでの位置を言うなら、シュクラールの親しい友人でもあった。彼女の没後にその論文を2冊の書に編み、『政治理論 (*Political Theory*)』誌に追悼記事を載せたのも彼であった。Judith N. Shklar, *Political Thought and Political Thinkers*, ed. Stanley Hoffmann, University of Chicago Press, 1998; Judith N. Shklar, *Redeeming American Political Thought*, eds. Stanley Hoffmann and Dennis F. Thompson, University of Chicago Press, 1998; Stanley Hoffman, “Judith Shklar as Political Thinker,” *Political Theory* 21-2, 1993, pp. 172–180.
- 78) ホフマン「アメリカン・ソーシャル・サイエンス」95頁注1。彼がこの点を指摘する際に言及しているのは、1960年に彼が編著者を務めたアンソロジーだが、以下で引用している1959年の論文は、同書掲載論文のその原型となったものである。
- 79) ホフマン「国際関係論」33頁, 34頁, 36頁, 37頁。
- 80) シュクラール『リーガリズム』190頁, ホフマン「国際関係論」60頁。個々の状況判断を重視する点にこそ現実主義の本領があると説くギロなどの解釈に従うとすれば、ホフマンについてもシュクラールと同じく、彼らの議論を誤解していた可能性は指摘しうる。ただ、ここでも本稿にとって重要なのはやはり、どちらの解釈が妥当かということではなく、この主張に浮かびあがっている彼の関心のありようである。
- 81) ホフマン「国際関係論」37頁, 42–43頁, 強調は引用者。
- 82) ホフマン「国際関係論」63頁。
- 83) C・ベイツ『国際秩序と正義』進藤榮一訳, 岩波書店, 1989年(原書は1979年)。
- 84) スタンレー・ホフマン『国境を超える義務——節度ある国際政治を求めて』寺澤一監修/最上敏樹訳, 三省堂, 1985年, 197頁。今日の政治理論において、ロールズ以後の規範理論に抗するバーナード・ウィリアムズらケンブリッジ・リアリストたちが、一方でシュクラールを評価し時折カーやモーゲンソーに言及するもの、この流れの延長と捉えてよいのかもしれない。シュクラールへの評価は、特に, Bernard Williams, *In the Beginning Was the Deed: Realism and Moralism in the Political Argument*, ed. Geoffrey Hawthorn, Princeton University Press, 2005, ch.5. カーをめぐる代表的な議論は、いくらか批判的でもあるが, Raymond Geuss, “Realism and the Relativity of Judgement,” *International Relations* 29-1, 2015, pp.3–22. ケンブリッジ・リアリストに位置づけられる研究者ではないが、モーゲンソーとシュミットの関係性を先駆的に論じてきたウィリアム・ショイアーマンも、そのカーに今日の現実主義より洗練された点を見ている。William E. Scheuerman, “The Realist Revival in Political Philosophy, or Why New Is Not Always Improved,” *International Politics* 50-6, 2013, pp.798–814. この他、現代政治理論の議論枠組みにおいて現実主義を論ずる際、折

に触れてカーやモーゲンソーに言及している特徴的な例として、Matt Sleat, *Liberal Realism: A Realist Theory of Liberal Politics*, Manchester University Press, 2013. ただし、法万能主義に関する議論をめぐっても触れたように、シュクラールの立ち位置にはより微妙な面があることにも注意は必要だろう。シュクラールとケンブリッジ・リアリストの連続性を想定する今日の風潮を戒め、彼女のロールズとの近さおよびウィリアムズとの距離を強調する解釈として、Forrester, “Judith Shklar, Bernard Williams, and Political Realism.” また、Katrina Forrester, “Hope and Memory in the Thought of Judith Shklar,” *Modern Intellectual History* 8-3, 2011, pp. 591–620.

- 85) David Armitage, “The Fifty Years’ Rift: Intellectual History and International Relations,” *Modern Intellectual History* 1-1, 2004, pp. 97–109.
- 86) Lionel Trilling, *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*, Viking Press, 1950.
- 87) ジョン・バース『旅路の果て』志村正雄訳、白水社、1984年。精神史上におけるこの作品の位置づけについては、アメリカ文学史を自我意識の変遷として描きだした次の文献も参照。平石貴樹『アメリカ文学史』松柏社、2011年。自律した個の概念を揺り動かすアドルノとトリリングの評論からアーヴィング・ゴフマンやC・ライト・ミルズの社会思想までを経るなか、1950年代にはポスト近代の思潮がアメリカでも予告されていたとする議論として、Robert Genter, *Late Modernism: Art, Culture, and Politics in Cold War America*, University of Pennsylvania Press, 2010. より素描的ではあるが、ほぼ同じ面々に真正さへの欲求を見る歴史叙述として、Ratner-Rosenhagen, *The Idea That Made America*, pp. 141 ff.
- 88) 実のところ、ウォルツやロールズの議論も、本質を不問にして仮象にとどまろうとする点ではポスト近代の思想と紙一重とも言える。ウォルツのポスト・ヒューマン的な技術ユートピアにおいて、人間についてもその集団についても、その中身などというものは問う必要がない。共同体を存立させるのに必要なのは、数量的に言い表せる軍事力などの外形的な条件だけなのである。この点、人為で変えがたいものを認識したがゆえに普遍的規範を通用せしめない構造に注目したのだとして、ウォルツの論理に偶然性と不確実性の源泉を見る近年の解釈は、著者自身が脱構築的との断りを入れているにも拘わらず、精神史的な文脈に即した読みだとも言う。Tom Lundborg, “The Ethics of Neorealism: Waltz and the Time of International Life,” *European Journal of International Relations* 25-1, 2019, pp. 229–249. 他方のロールズも、批判者たちに応じて理論を修正していくなかで、自身の論理に潜在していた相対主義の側面をより露わにしていく。彼の後期主著とされる『政治的リベラリズム』（1993年）において、正が善に優先されるべき理由は、今や人々は善に関して余りにも相対的であって包括的な道徳教義について的一致は望みえないから、というものである。したがって、カントやミルといった人々が前提としていた人格観

をめぐる哲学的な論争には、立ち入る必要がない。求められているのは、政治的な次元における共通基盤の模索である。「近代民主主義社会は、包括的な宗教的・哲学的・道徳的教義の多元主義のみでなく、相容れないが筋の通った包括的教義の多元主義によっても特徴づけられている。これら教義のどれ一つとして、市民によって普遍的に支持されるものではない。そのどれか一つ、あるいは筋の通った他の何らかの教義が、予見可能な将来において市民の全員ないしほぼ全員によって支持されるなどということも、期待すべきではない。政治的リベラリズムが想定するのは、政治的な目的に照らした場合、筋が通っているが相容れない包括的教義の多元性が、立憲民主主義体制の自由な諸制度の枠組みにおいて人間が理性を揮う、正常な結果だということである」。John Rawls, *Political Liberalism*, Columbia University Press, 1993, p. xviii. その都度維持しうるフィクションでよいのだと言わんばかりのこの論理において、普遍的な倫理基盤を模索する営みという意味での政治哲学は、復権が成されるどころかその死を承認されているように見える。ただ、ウォルツもロールズも、こうした相対主義的な要素を、——たとえば、何も共通しないことにのみ共通性を認めるブランショやナンシーのような路線とはらず——最後は一つのシステムのなかに包み込んでしまおうとするだろう。『政治的リベラリズム』において、先ほど引用した箇所は後にこう続く。「政治的リベラリズムは、ある筋の通った包括的教義が民主的体制の本質を否定するものではないとも想定する。もちろん、社会は、筋が通らない非合理的な、さらには狂った包括的教義を、抱えもするかもしれない。そういった場合に問題は、そうした教義が社会の統一と正義を掘り崩さないよう、それらを封じ込めることである」。Rawls, *Political Liberalism*, pp. xviii–xix. 繰り返せば、そうして多元的なものを単一の集合体のなかに包摂することこそがウォルツやロールズのまずもって目指しているところであって、多様な原子的主体から成る社会はそこにおいてこそ形を保つことができる。個々に様々でありうる人間に平等な権利を保障しようとするればその客観的・形式的な要件を探ることとなるわけで、ゆえに自らの立場を一般理論として提示する必要に迫られる自由主義者たちは、そこを最後の一線とせざるをえないのだろうか。ただ、そうして形式へ埋没するがゆえに、彼らは相対主義を承認してしまう。

- 89) James Der Derian, "Introducing Philosophical Traditions in International Relations," *Millennium: Journal of International Studies* 17-2, 1988, pp. 189, 189, 190. しかもダー・デアリアンは、ウォルツを批判する一方でモーゲンソーらを評価しさえしたのであり、現実主義の権威を中身は挿げ替えつつ借りたのであった。この点は、Seán Molloy, "From *The Twenty Years' Crisis* to *Theory of International Politics*: A Rhizomatic Reading of Realism," *Journal of International Relations and Development* 13-4, 2010, pp. 398 ff.
- 90) Jim George, *Discourses of Global Politics: A Critical (Re)Introduction to Interna-*

tional Relations, Lynne Rienner, 1994, p. ix.

- 91) さらに言えば、ウォーカーが所属大学で担当していたのは政治理論の講座であった。その彼が国際関係論における既存のマキアヴェッリ像を批判する際、モーゲンソンの解釈は、シュトラウスおよびヴェーバーのそれぞれによるそれと並んで、特異な近代理解に拠るものだとされる。R. B. J. Walker, *Inside/Outside: International Relations as Political Theory*, Cambridge University Press, 1993, p. 195 n.2. この点に関しては次も参照。Simon Labrecque, “Rearticulating Recoveries of Importance: A Reading of Walker’s Strauss’ Machiavelli,” *International Politics* 53-4, 2016, pp. 487–504. 今日、古典的現実主義者たちをポスト近代主義者であったと解するような議論も少なからず見られる。両者がともに近代へ批判的な眼差しを投げかけていたのは確かだろう。しかし、このウォーカーの例に見られるように、両者の関係はより振れたものである。現実主義者から見ると、ポスト近代主義者たちは、実証主義者やプラグマティストに劣らない程度には相対主義的にすぎるだろう。他方、ポスト実証主義者から見ると、現実主義者たちは、実証主義者やプラグマティストと同じくらい形式主義的にすぎるのである。
- 92) 以上に加え、近代の問いなおしがしばしば（イデオロギーとして自由主義の向こうを張る）マルクス主義の再考を伴う形で行われたことも——20世紀後半の思想界隈におけるマルクスの重要性からすれば半ば当然ではあるのかもしれないが——いくらか注意されてよい。たとえばリチャード・アシュリーのよく知られた論文も、マルクス主義をめぐる議論から構造的現実主義批判を始めていた。Richard K. Ashley, “The Poverty of Neorealism,” *International Organization* 38-2, 1984, pp. 225–286.
- 93) 構成主義が中道を占めるべきことを掲げた議論は、たとえば, Emanuel Adler, “Seizing the Middle Ground: Constructivism in World Politics,” *European Journal of International Relations* 3-3, 1997, pp. 319–363. さらに言えば、ポスト実証主義者たちが国際関係論へ持ち込んだ大陸思想にしても、事前にアメリカの土壌と適合するよう設えられた「フレンチ・セオリー」だったかもしれない。大学の専門分化が進み、学問と現実社会との隔たりが増していたアメリカにあって、カウンター・カルチャーの高まりを機に両者の中間領域で切り拓くべく導き入れられたのが、フランスの思想であった。とりわけそれは、元から学際的な分野だった比較文学を中心に、新たな文学理論の創出という形で推し進められる。結果、近代への根源的な疑いに発したはずの哲学的思索は、学問諸分野を支える既成の言説構造を揺るがす道具と化していくなかで、近代自由主義国家アメリカの多様性をますます押し広げるための——差異の政治やアイデンティティ・ポリティクスといった——理論へ置き換えられていくだろう（キュセ『フレンチ・セオリー』）。国際関係論でポスト実証主義者たちがとり入れたのも、この手の議論だった。クリフォード・ギアツの『文化の解釈学』と『ローカル・ノレッジ』からポール・ラビナウの『フーコー読本』まで、そこでは文化

人類学者たち——ルース・ベネディクトとマーガレット・ミードの文化相対主義に連なるあの文化人類学——の著作がしばしば引かれていた事実をここで想い起してもよいだろう。あるいは政治理論においても、ポスト構造主義を他ならぬプラグマティズムに接合する試みがリチャード・ローティによって行われる。それも国際関係論で受容されただろう。

とは言え、こうした展開を導いた素地は、ポスト近代の思想自体にも備わっているかもしれない。ハーバーマスの英語版インタビュー集に序文を寄せているピーター・デューズは、ポスト構造主義と保守的反啓蒙運動との同盟関係を指摘した彼に倣い、ポスト近代主義者による「大きな物語」の終焉と「イデオロギーの終焉」論を——処方箋は相反するが現状認識はよく似たものとして——並べている。Peter Dews, “Editor’s Introduction,” in *Autonomy and Solidarity: Interviews with Jürgen Habermas*, ed. Dews, Verso, 1992, pp.6–7. このハーバーマス-デューズによる診断をローティにあてはまりうるものと捉えた議論として、リチャード・バーンスタイン『手すりなき思考——現代思想の倫理-政治的地平』谷徹/谷優訳、産業図書、1997年、387–388頁。また、キュセ『フレンチ・セオリー』201頁以下も参照。

- 94) 先述のウォーカーに見られた類の思惟様式に於けるかのようにしてブルームが展開していた反基礎づけ主義への批判は、アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉——文化と教育の危機』菅野盾樹訳、みすず書房、1988年（原書は1987年）。関連して、本稿とは関心のあり方が異なる大学論からの議論ではあるが、シュトラウス、ブルーム、ローティの異同をめぐっては、藤本夕衣『古典を失った大学——近代性の危機と教養の行方』NTT出版、2012年。
- 95) 歴史を経て定着してきたところの立憲民主主義体制を概して正義に適用するものと捉えたルールズにおいては、「歴史の終わり」テーゼも否定されるものではなかっただろうと、齋藤純一は推論している。齋藤純一「政治思想史におけるルールズ——政治社会の安定性という観点から」井上彰編『ルールズを読む』ナカニシヤ出版、2018年、195–196頁。
- 96) 最後までやはり、シュクラールの議論を借りておこう。彼女に言わせると、技術合理性への信頼が啓蒙近代に根を持つ限りで特殊ヨーロッパ的なものだったとすれば、「法の支配」への拘りにも独特の保守的な傾向が埋め込まれていた。法万能主義への執着とは、「冷戦や、ヨーロッパ世界に今や挑戦している、植民地状態から脱した諸々の非ヨーロッパ社会の政治機構に対する一つの対応である。これらの出来事は我々すべてに文化的に自己を意識させている。その結果が、独自性の探求、西欧独特の否定しがたい伝統の探求である。その伝統の核心が、それを発見した人々にとっては、本質的にリーガリズム、法の支配なのである」。シュクラール『リーガリズム』31頁。脱植民地化をめぐる議論は本稿の検討対象ではない。ただ、国際関係論の「終わり」が問われるなかにあって、一般に科学主義的な方法論への対抗を一特

〈政治哲学の死〉の影で

徴とする非西欧型国際関係論なるものが模索されること、それもまた、純科学的な客観性と技術合理性への信仰が背景とするこの文脈に照らしてみた場合、自然なのだとは指摘しておいてよいだろう。

〔付 記〕 本稿の元となった論文は、日本国際政治学会 2020 年度大会部会 5「冷戦を考える——歴史・思想・植民地主義の観点から」において報告の機会をえた。同集会の参加者に御礼申し上げる。

